

早稲田大学本庄高等学院
2022年度 学校自己評価・関係者評価

2023.3.31

早稲田大学本庄高等学院

0. withコロナ・postコロナにシフトした2022年度学校運営

2022年度は、社会の動きがwithコロナにシフトした年となった。感染状況は、新型コロナウイルス感染が始まった2020年、2021年に比べ、第六波、第七波、第八波と、比較にならないほど悪化したが、「得体の知れないウイルス」として闇雲に恐れていた2020年度と異なり、ワクチンの普及もあり、症状への恐怖感が少なくなったことが背景にある。

本校では、これを受け、可能な限りコロナ禍以前の生活に戻す努力を行った。大きな行事である、体育祭は時間を短縮して実施（午前中、団体競技のみ）、稲稜祭（文化祭）は食材を扱うことを禁止して実施した。生徒活動では、宿泊活動が可能になったことが大きい。夏休みには、部活動の合宿を含む宿泊活動を解禁した（海外・国内で船や航空機を使うものは禁止）。また、修学旅行も国内ではあるが3コース（広島・北陸・関西）に分けて実施することができた。学校説明会、保護者会もコロナ禍以前に戻し、対面で実施できた。入学式は保護者を1名に制限し、卒業式は保護者を2名に制限して実施することができた。

一方で、コロナ禍中に培われたオンラインコンテンツやノウハウをうまく利用することによる新しい動きも見えてきた。対面の授業とオンラインコンテンツを併用することにより、授業がわかりやすくなる、復習しやすくなる、さらには欠席した生徒に役立つことにつながる。学校説明会では、オンラインであればわざわざ来て参加する必要があるため、海外の受験生も含め、大幅に参加者が増加した。一方で説明会に気軽に参加できるため、説明会に参加した中でどのくらいの受験生が実際に受験するのか、予測がしにくくなった側面もある。また、実際にキャンパスを訪問しないまま入学してしまうことが、学校選択のミスマッチにつながる懸念もある。

キャリア講座や課外講義の一部を夜にオンラインで実施することにより、生徒のみならず保護者もコロナ以前には参加できなかったプログラムに参加できるようになった。このことは、保護者の学校理解につながっている。このようなコロナ禍で得たオンラインコンテンツやノウハウを活かすことにより、ポストコロナにおける次世代の学校運営につながるものと考ええる。

しかし、その一方で、この間に失われているものは、計り知れないほど大きい。教育現場で失われたものは、お金という数字のように目に見える形になりにくいいため、社会がその問題を認識しにくいことが、この問題をさらに大きくしている。例えば、過去の2年間における宿泊を伴う合宿や研修活動は皆無であり、ようやく今年度実施することができている。このことから団体活動経験の欠落が予想される。また、ほとんどの行事が中止あるいは規模縮小を余儀なくされているため、生徒主体で実施する伝統が途切れてしまっている。今年度の体育祭や稲稜祭は生徒が伝統を知らない中で、教員の指導を受けながら試行錯誤で実施した。コロナ禍以前はその活動の中で培われたであろう、協働作業意識やリーダーシップ養成の機会が欠けている。

思春期という多感な時期に、本来は獲得してほしい重要な経験が日本全国的に欠落してしまっている反動は、いずれどのような形で現れるのか、私たちは注意を払わなくてはならない。

1. 教育理念・目的・人材育成像

早稲田大学は早稲田大学教旨に示された3つの建学の理念、すなわち「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」に基づき、教育・研究を展開している。その上に、2000年に「21世紀の教育研究グランドデザイン」を発表し、08年には創立125周年を契機に「Waseda Next 125」を策定して「早稲田から WASEDA へ」をスローガンに定めて広く世界で活躍する人材の育成に努め、グローバルユニバーシティを目指すこととした。さらに、創立150周年を展望した「Waseda Vision 150」を12年11月に策定し、「アジアのリーディングユニバーシティ」として世界に貢献する大学であり続けるためのビジョンを社会に公表し、目指す方向性を明らかにしている。

早稲田大学本庄高等学院（以下本庄学院と略）は早稲田大学創立100周年を記念して1982年に男子校として開校した。2007年に男女共学となり、2012年に現在の校舎に移転した。全国各地および世界各国から、将来早稲田大学を目指す意欲的な生徒を集め、自由と自立の校風

の中「自ら学び、自ら問う」という教育方針のもとで「進取の精神」に満ちた活力ある生徒を育てることを教育の基本としてきた。

加えて、「Waseda Vision 150」に関連し、2012年11月、「本庄高等学院の将来構想」を発表した。すなわち地域の特色を生かした「森に想い土に親しむ」教育をいっそう発展させた、教科横断型の教育・研究活動を通して、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成することを目的としている。

本学院は早稲田大学での一貫した教育体系の中に位置づけられ、卒業生全員が早稲田大学の各学部に進学すると規定されている。したがって本学院の目的は、早稲田大学教旨、「Waseda Vision 150」、そして「本庄高等学院の将来構想」に基づいた教育・研究活動を行なうことである。生徒に対しては、知的関心を高め論理的な思考力、豊かな感性を育成し、さらに大学における専門的な学問の分野も模索させ、また大学での幅広い本格的な学問研究に必要な、基本的な学力・体力を養成することを目指している。その目的は本年度においても継承されている。

2. 教育活動

2.1 授業

2.1.1 授業運営

本年度もコロナ禍の中、授業展開に際しては昨年までの経験を活かし、安全を考慮した上で、できる限り対面の授業を実施した。秋には一時的に罹患者が増え学級閉鎖や授業の切り上げなどの措置を行ったが、コロナ禍以前と同様の授業を行った。また、コロナ感染等で登校できない生徒には、教科担当者ができる限りの学習指導を行い、学力低下を防ぐ努力をした。

（ア）国語

2022年度は対面での授業となったため、多くの授業でコロナ禍以前のような音読（群読）や発表を実施できた。また、PC、iPad、書画カメラ等のデジタル機器を積極的に用いた授業への取り組みを本年度も継続して行なった。

さらに、国語の授業内で生徒に取り組みさせた公募作品（全国高校野球選手権記念大会キャッチフレーズコンクール、さかい与謝野晶子 青春の短歌大会、若山牧水青春短歌大賞）が上位に入賞するなど、めざましい結果を残している。

（イ）数学

2022年度は対面授業が通常となり、コロナ禍以前の授業環境を提供することができた。加えて、出張などでどうしても対面授業ができない場合でも、コロナ禍で身につけたオンライン授業によって、円滑に授業を進めることができた。

昨年度同様、自学自習LAの制度を導入し、専任教諭・非常勤講師に加えて大学生による質問対応の時間を設け、手厚いフォローを行なった。今年度は、学年末だけでなく、11月にも実施することで、3年生への対応も十分に行なった。

（ウ）理科

理科の実験実習においては共同作業、ディスカッションが不可欠であるため、実験室入室時に手指の消毒を徹底し、マスク着用の上で換気しながらの実施とした。また実験器具も共用のものであるため、各クラス終了後のこまめな消毒を心掛けた。一方で過度に実験実習の頻度等を減らすようなことは無くなり、2021年度よりも充実した実験実習を実施することが出来た。

（エ）地歴公民

「自ら学び、自ら問う」という学習基本方針に従って、主体的・能動的な学びを促すことを重視する一方、附属校として、常に学部における学びとの結びつきを意識しながら授業を展開した。以下、歴史分野、地理分野、政治・経済分野、公共・倫理分野に分けて振り返る。

【歴史分野】

単に出来事の時系列や人物の暗記を求めるのではなく、現代という時代が、過去の長い歴史

の展開の結果であることを意識させるよう心がけた。特に現在の動向に関連する歴史的事象についてはそれを強調し、受講生自らが「歴史を学ぶ意義」について考えることができるようになることを目指した。地図・人物・建築物等の写真をはじめとする視覚教材を積極的に用いることによって、受講生の想像力を掻き立て、歴史に対してより親しみを持たせるような工夫も行った。

【地理分野】

既存の高校地理の学習範囲にとらわれず、それまで学んできた他教科での学習内容を可能な限り援用しながら、身の回りの風景や土地利用の成り立ちについて、地理的事象の因果関係を自分の文章で論理的に説明できる能力を養うことを目標とした。また、授業で得た知識が、自分自身の今後の生活における知恵として活かされるような授業を心がけている。

【政治・経済分野】

生徒によるグループワークやディスカッションを取り入れ、主体的・能動的に学ぶ機会を多く設ける努力をした。たとえば、任意の国際問題について自ら論点を設定して全員で討議する授業を行ったり、ウクライナ侵攻とロシアにおける情報統制に関連し、憲法記念日を前に表現の自由を考える授業を行ったりした（後者の授業の様子は NHK「ニュースウォッチ9」でも取り上げられた。）。

さらに、授業で扱った内容を探求する研究ポスターの制作・展示も実施した。また、技術的な面では、コロナの影響で出欠状況がなお不安定であったため、授業関連資料を Moodle に置く等の方法で、受講できなかった生徒への配慮を行った。

【公共・倫理分野】

受講者に対して、哲学や正義論に関する高度な内容の文献を正確に読み込む訓練を促しつつ、物事を根底から考えるとはどういうことなのかを理解させるように努めた。また、単なる資料集めレベルではない、主体的で高度な思考が要求されるレポートを課し、自分の頭で考えることの重要性を認識させた。

（オ）英語

3年間を通じ、スピーチやプレゼンテーションをはじめ自分の考えを相手に伝える機会を適宜設けている。本年度もマスク着用、手の消毒など感染防止に努めながら相手に伝える活動を実施した。これにより、生徒の発表の機会の確保することにつながり、パフォーマンス活動の充実を図ることができた。

（カ）保健体育

本庄高等学院の有する体育施設をフル活用し、年間を通じて様々な種目に取り組んだ。特に体育館での授業は3クラス同時展開が可能となり雨天時の代替授業も展開できる施設が整った。また、体育館はWiFi利用が可能となり、映像を見せながらの授業展開が可能となり生徒の技能習得に大きな役割を果たした。

充実した環境をフル活用し、さらに授業・教材研究を進め楽しく学べる体育授業の展開に努める。

（キ）芸術

芸術科の科目は実技教科の一つであり、特に対面による教員と生徒・生徒同士のやり取りが行われることで、授業はより活発になり充実した内容となる。2022年度はオンライン授業もなかったことから、コロナ禍前の2019年度とほぼ同様の授業内容を実施することができた。授業後のアンケートでも、「一般教科の学習に追われる最中、とても良い息抜きの時間になった」と回答している生徒が多数居り、学院生の充実した日々へ寄与できていたことがうかがえる。

音楽Ⅰの授業は、1学期には様々な名曲の歌唱、打楽器アンサンブル、ハンドベル合奏に取り組み、2学期には旋律譜に記されるアルファベット（コード記号）の解説の仕方を細かくレ

クチャーした上で、グループ活動・演奏発表を行った。各班で選んだ楽曲の一部分を、旋律担当・伴奏担当に分かれて、オリジナルの合奏を行った。班の分け方が、くじ引きによる男女混合の組み合わせだったため、そのことがクラス内の交流を図る良い機会になったことも、多く触れられていた。3 学期は、個人・グループによる演奏発表を行い、色とりどりの発表が連続したことで、生徒たちも大満足のものであった。

美術 I の授業は、本庄キャンパス内のスケッチおよび水彩画、将来の自画像、創作お面、モノトーンによる著名人の肖像画と平面構成の課題に取り組んだ。

本庄高等学院は、クラス単位で音楽 I と美術 I を履修できるため、グループワークを中心にする事で自然とクラス内の交流が図られ、一致団結する機会が非常に多く生まれる。生徒たちもそのことを非常に強く実感したようで、高等教育ならびに本庄高等学院における芸術科の学びの意義を大きく見出す一年となった。

（ク）家庭

家庭科では、調理実習の実施に苦労した。3 年生の選択食文化は少人数授業（20 名）であったため、生徒同士の距離をとって調理し、概ね計画通りに学習させることができた。1 年生の必修授業は予定していた実習 5 回のうち 3 回しか実施できなかった。実習内容は、焼き菓子や鍋料理（つみっこ：本庄市の郷土料理）、カカオ豆から作るチョコレート（Bean to Bar）であった。これらはコロナ禍でも安全に取り組むことのできる内容であった。

実習以外にも、特に家族・家庭生活に関する分野の学びでは生徒たちのディスカッションの実施に苦労した。家庭科は、学びを深めるために多様な価値観に触れることが欠かせない。生徒が感想や意見を発表し、互いに刺激を受け合うという学びが不足した。

（ケ）情報

大学各学部から要望の多い統計解析言語 R を 2 年生の「情報の科学」に導入して 2 年になる。2021 年度から 1 年生に対して新教育課程「情報 I」2 単位を実施しているが、そこでもプログラミング言語として R を実施した。R のオリジナル教材を作成した。

2022 年度の反省としては、旧課程では 1 年次 2 年次 1 単位ずつ実施していた授業内容を、新教育課程では 1 年次 2 単位となるため、そのまま 2 学年分を移行したところ、課題に対する生徒負担感と教員の成績評価の負担感が増したことが挙げられる。2023 年度はその反省を活かし、内容の精選を計りたい。

情報科の特徴として他校と異なる大きな側面は、本校の特色である探究活動（卒業論文）と有機的な連携を図るため、アカデミックリテラシー養成およびプレゼンテーションスキル養成に関する内容を強調していることである。

2.1.2 必修科目・選択科目

（ア）カリキュラム

カリキュラムは 1 年次から 3 年次まで、各年度 32 単位構成で 3 ヶ年 96 単位となっている。なお、今年度第 1 学年から新課程が適用されている。

- ・ 1 年次：芸術科目を音楽履修クラスと美術履修クラスに分け、その他の必修科目は共通に履修する。
- ・ 2 年次：ゆるやかな文理選択分けを実施している。文系は古典（2 単位）を選択し、理系は物理（1 単位）および科学課題研究（1 単位）を履修する。また、数学（3 単位）は、文系は経済や商学部で必須とされている内容を、理系は理工学部での学習の基礎となる内容を扱っている。
- ・ 3 年次：32 単位の構成は、文理共通科目（15 単位）、必修選択科目（12 単位）、自由選択科目（2 単位）、総合的な探究の時間（2 単位）、HR（1 単位）となっている。文系と理系では、必修選択について科目および科目数が異なる。文系は 66 科目 12 単位、理系は 4 科目 12 単位である。また「総合的な探究の時間」は、キャンパスに素材を求めた半期ごとの輪講形式の「大久保山学」（1 単位）と、「卒業論文指導」及び「修学旅行事前学習指導」を行う「課題研究」に配分している。

（イ）必修科目

必修科目の授業計画は、毎年、前年度の生徒の授業評価の分析・検討に基づいて作成している。また、すべての教科において年度始めにシラバスを作成し、それに沿って授業を展開している。

第 1 学年では、主に基礎学力重視の観点から中学校の内容との連続性を意識して展開し、第 2 学年では学力の充実・発展の観点から構成を考えている。第 3 学年では大学での教育との連携を意図し、各科目の特徴を捉えて授業を行っている。

授業の基本方針は、わかりやすい授業、探究や思考力、判断力、表現力を高め、生徒が主体的に取り組めるような授業形態、大学への架け橋となる専門的な内容を盛り込んだ授業、社会との関わりを意識した授業を心がけている。具体的には理数教科で学部教育の基礎となる学力の強化をはかるべく、一定の基準に達しない生徒への追試や補習授業を行った。さらに、語学や人文社会科学系の科目では、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業も多く、また、プレゼンテーション技術の習得や論文執筆指導を含む授業展開も多くなされた。

最近では、反転授業・ジグソー法などの新しい授業形態を取り入れたものや、複数科目のラボレーション授業など、新しい授業形態への取り組みも多い。また、各科目の節々で本学院の特色である論文教育を推進するアカデミックリテラシーを意識した授業展開がなされている。

（ウ）選択科目

- ・ 2 年次：どの分野に進む生徒にも、数学では数学Ⅱ及び数学 B を必修としている。ただし、理工系で必要とされる内容と経済や商学部などで必要とされる内容は異なる部分もあるため、数学に関しては文系用と理系用を用意して選択させている。また、文系には古典を、理系には物理・科学課題研究を用意し、考えることと実際に体験することを軸に据えた授業を展開している。
- ・ 3 年次：本学院のカリキュラムの最大の特徴として、3 年生に豊富かつ多様な選択科目を履修させていることが挙げられる。音楽や美術、第二外国語（フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語等）も含む選択科目は、必修選択と自由選択を併せ、文系は 7 科目 14 単位、理系は 5 科目 14 単位を選択することが規定となっている。具体的な内容としては、学部の専門科目の導入的な性格を持つもの、時代に必要とされる力を意識したもの、早稲田の一員ということを認識させるものが設置されている。

（エ）英語能力試験

4 月に GTEC Advanced (3 技能)、9 月に TOEFL ITP、11 月に 3 年生のみ GTEC4 技能試験を実施した。GTEC3 技能試験を実施する背景は、

- ① 学院生が自らの英語能力を客観的に知るため
- ② いくつかの学部進学の際に英語力が資格要件として課されているため
- ③ どの学部からも調査書と共に英語の 4 技能外部テストスコアの提出を求められていることに対応するためである。

（オ）大久保山学

「大久保山学」設置の趣旨は、キャンパス環境を利用した学習教育プログラムや、学際的かつ総合的な視点から学習に取り組むことで、断片的な知識の集積ではなく、総合的な理解力や判断力を養成することを狙いとしている。本学院を取り巻く自然環境や歴史的遺産を生きた教材としてカリキュラムに活用するという考え方がその基となっている。

本学院は本庄市の浅見山丘陵に位置し、面積は 70 数 ha、長辺は 1.5 km に及ぶ。丘陵の一部の字名は「大久保山」であり、通称的に丘陵地帯全体を大久保山と呼んでいる。ここからは埴輪や土器などが大量に出土しており、丘陵周辺の平地には条里制の遺構跡も発見されるなど、山全体が歴史的遺産と位置づけられる。また、オオタカをはじめとする多くの野生生物が棲息し、多様な樹木や植物が繁茂している。さらに本庄キャンパスのわきには利根川の支流である小山川、農業用水路である男堀川が流れ、科学関連プログラムの水質・生物調査の対象になり、

地域との交流の舞台にもなっている。

本学院は「将来構想」（2012年11月公開）の中で「大久保山学」を教育の特色の一つとして位置づけ、具体的にどのような教育プログラムが展開できるかについて検討を開始した。そして2013年の「Waseda Vision 150」の中で、「地域の特色を活かした『森に想い土に親しむ』教育を一層発展させた『大久保山学』をテーマに、科目横断型の教育・研究を通じて、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成する」と基本理念を定め、その実現を図るための教育プログラムを「大久保山学」とした。

授業は木曜2時限目に8講座を同時開講し、前期と後期で異なった講座を履修する Semester 制とした。生徒は8通りの組み合わせパターンの中から1つを選択することとしている。下表は2022年度の大久保山学の一覧である。

コース	前期	後期
1	本庄市周辺の歴史と文学	大久保山の環境と生物多様性
2	『平家物語』からみる武蔵武士	大久保山に住む人って、どんな人？
3	大久保山での数理探究	本庄市周辺の歴史と文学
4	不確実性下における意思決定入門	Silent Springを通して考える環境破壊と大久保山
5	大久保山から環境・エネルギー政策を考える	不確実性下における意思決定入門
6	大久保山の環境と生物多様性	『平家物語』からみる武蔵武士
7	Silent Springを通して考える環境破壊と大久保山	大久保山での数理探究
8	大久保山に住む人って、どんな人？	大久保山から環境・エネルギー政策を考える

（カ）課題探究

第3学年の木曜3限に総合的な学習の時間「課題探究」を設定している。この科目は第3学年の組主任8名で担当し、年間20回の授業を修学旅行関連学習に約10回、卒業論文指導に約10回を年間計画で配置し実施している。同時に、学年集会（ガイダンス・学院長による修学旅行関連講話）や学年行事（教育実習生によるパネルディスカッション）との関係も図っている。

修学旅行関連学習では、COVID-19のために昨年同様海外への修学旅行を中止し、国内旅行に向けての事前学習（ガイダンス、班決め・実行委員決め、コース別学習）を行った。

次項（キ）に詳細のある卒業論文については、個々に異なるテーマを探究しているが、この総合的な学習の時間を用いて探究過程や内容の発表により取り組みを共有し、自分のテーマのみならずより広い範囲に目を向けての探究活動を行う機会となった。またこの時間を担当教員とのディスカッションに充てる機会もあり、課外活動等である程度限られてしまう放課後の時間だけでは得られないより深い探究活動ができています。

（キ）探究活動（卒業論文）

3年間の学習のまとめとして卒業論文を執筆させている。「自ら学び、自ら問う」という本学院の教育方針の具現化のひとつである。2年次の9月から10月中旬までの約2か月をかけテーマを決めるが、専任教員と一部の非常勤講師のからなる担当者と綿密な話し合いをした後に、卒論のテーマが決まる。その後、12月から3年次の12月まで約1年間で、論文を完成させる。テーマに関しては進学希望学部との関連は問わず、自由に選ばせている。

自分の決めたテーマにじっくりと向き合い、資料を集め考察し、自分の意見をまとめ、それを論理的な文章に表す。この作業を通じて、さまざまな課題に問題意識を持つこととその解決方法、学術的な調査の方法、客観的な説得力を持つ文章の書き方、著作権や知的財産権への配慮等を学びながら自分自身の考え方をしっかりと持つことができ、学部進学への自覚を促すことになる。

論文執筆期間の、4月と9月に4000字程度（英文はA3用紙5枚程度）の中間報告を義務付け、その都度担当者との協議をすることになっている。

- ・ 第1次中間報告 4月
テーマ登録からすでに5ヶ月が経過している。この間の進捗状況を報告する。
- ・ 第2次中間報告 9月
夏休みを経過し、まとめの作業に入る前に、論文構成の確認のために目次を作る。

なお、論文の枚数などは以下の通りである。

- ① 用紙：A4、1 ページに 35 行、1 行は全角で 40 字（1 ページあたり 1,400 字相当）。Microsoft Word（doc、docx）で作成。
- ② 分量 15 枚以上。
- ③ 規程枚数には目次、本文、図表、注、参考文献リスト等を含める。但しアブストラクトは含めない。
- ④ 印刷：A4（縦書き、横書きともに同じ）用紙の片面に印刷する。
- ⑤ 学院から配布される所定のファイルにとじること。
- ⑥ 表紙には、配付の所定の表紙を使用すること。
- ⑦ やむを得ずタイトルの変更をしなければならない者は、事前に担当教員の許可を得ておくこと。
- ⑧ 英文の場合は、A4 用紙にダブルスペース、半角で作成し、片面印刷で 25 枚以上とすること。枚数に含めるべき内容は和文の論文に準じる。Microsoft Word（doc、docx）で作成する。

【卒論報告会】

本年度は、実に 3 年ぶりに、コロナ禍以前と同様の形で卒業論文報告会を開催することができた。稲稜ホールに集まった 2 年生に、早稲田大学本庄高等学院 3 年生 3 名と慶應義塾湘南藤沢中・高等部 6 年生 1 名が、卒業論文の内容と執筆過程紹介を報告したのである。1 年生の希望者にも、YouTube で映像配信を行った。

本年の報告は以下の通りである。

- ・ 「愛情表現による日英語比較」
- ・ 「損失が効用に与える影響の大きさは、利得が効用に与える影響の大きさの 2.25 倍になるのか」
- ・ 「マルチエージェントシミュレーションを用いた信号交差点の再現と非線形回帰による最適サイクル長の導出」
- ・ 「墓地政策の現状と展望」

慶應義塾湘南藤沢中・高等部からは教員 2 名・生徒 5 名が、早稲田実業学校高等部からも教員 1 名が来校し、卒業論文を通じて活発な学術交流を行うことができ、有意義な教育機会となった。

2 年生にとっては執筆を進める上での大きな指針に、1 年生にとっては今後の卒業論文におけるテーマ設定や構想のまとめ方などの参考となり、学習上の効果が達成されたことと思う。

2.2 課外講義

2.2.1 キャリア教育

従来の進路指導では、学部説明会を中心に、学部で学べる内容を理解してもらい、自分の行きたい学部を選択するというスタンスであった。

しかし、留学やセカンドスクール、大学卒業後のキャリアプランなどを視野に入れた進路指導を考えた時、これらの指導方法は、学部での生活に加え、実際に仕事についている社会人や現役の学生の話聞いて、大学生活のデザインをイメージした上で、長い社会人生活を見通したうえで、これから何を学ぶかを考える機会を与えることが必要であると考えた。そのためには、一度自分の将来の方向をおぼろげながらも想像し、そこへ至る過程としての大学生活という、大学の位置付をしっかりと考える必要がある。

このような進路指導に対する考えから、本校では自分の将来を考えるきっかけとしてキャリア教育を充実させるべく、社会人や大学教員そして現役大学生・大学院生から直接話を伺く機会を設けている。このことを具現化する目的で、9 月に集中的に行うキャリアデザインウィークと、月一度のペースで行うキャリアデザイン講座を実施している。

（ア）キャリアデザインウィーク

9月にキャリアデザインウィークを設け、現在の学院生活、大学、その先の将来を有機的に結び付けたキャリアパス意識を啓発するような講座を集中的に行った。以下の表にその概要を示す。

なお、今年度は3年ぶりに、対面形式がメインでの実施となった（講師や受講者数の都合により、一部はオンラインで開催した）。

部門	日程	分野	タイトル	参加者数
進学の部	9月10日・14日	政治経済学部	日本の政府債務と財政破綻	100
		文化構想学部	「反対側から風景を見る」	36
		基幹理工学部	「別の在り方」をプロトタイプングする	51
		国際教養学部	「記憶」の心理学	93
		文学部	言葉の「意味」とは何か：言語哲学入門	38
		先進理工学部	パワーエレクトロニクスと電動モビリティ	66
		政治経済学部	国際関係史への道案内ー私たちはどんな世界に生きているのかー	67
	9月21日	教育学部	「百人一首」の撰者は藤原定家か	14
		商学部	ビジネスと経済学	92
		スポーツ科学部	スポーツビジネス法	8
		創造理工学部	ライフ・サポート・ロボティクスーXR/AI/ロボット技術を駆使して社会問題の解決に挑むー	67
		人間科学部	コミュニケーション支援入門	14
就職の部	9月10日	東京地方裁判所	私が裁判官になった理由	30
		株式会社日本マイクロソフト	“自分らしく”生きるためのキャリアの選び方	15
		LINE 株式会社	ソフトウェアエンジニア入門	27
	9月17日	旅客鉄道株式会社	早稲田で得た経験や考え方	25
		法律事務所	法曹（弁護士）になるために	16

【進学の部】

早稲田大学の各学部から講師が来校し、各学問分野で最先端をいく高度な内容の講義が、高校生の理解度に合わせて行われた。本庄高等学院の卒業生たちの学部や大学院での活躍を紹介してくれた講師もいて、会場は大いに盛り上がった。生徒たちは、講演の後にも活発に質疑を行うなど、講師とのやり取りを行うことができた。附属校として大学を意識し、また、ミスマッチのない進学のために大学について理解をする、良い機会となった。

【就職の部】

既に社会人となった5名のOB・OGが講演を行った。法律事務所・東京地裁・IT系企業等、多彩な就職先の卒業生が集い、学院生活や学部選択、大学生活や就職活動の話を熱心に披露してくれた。コロナ禍中の大学生活・就職活動の話は大変興味深く、参加した生徒たちは熱心に講師の話に耳を傾けていた。

なお、本行事の企画・運営にあたったのは進路指導委員会であるが、今年度の役割は主として本行事および卒業論文報告会の「実行部隊」にとどまった。たとえば日医への推薦基準の検討、学部からの推薦条件案に対する適用年度等についての対案提示などは、現状の教科主任会でも構わないが、機能上は「進路指導委員会」でも良いのではないかという意見が、委員会内であった。次年度以降は、学院としての進路指導のあり方の検討や、学年間の情報共有、方針・意向の調整などの、進路指導委員会としての本来的な任務にも取り組んでいきたい。

（イ）キャリアデザイン講座

9月に集中的に行うキャリアデザインウィークと並行して、およそひと月に一度、年間6回程度のペースで本校OB/OGを招き、キャリアデザイン講座を開講している。以下は2022年度実

施内容である。

	日程	職業	タイトル	参加人数
第1回(14名)	4月18日(月)	気象予報士	気象キャスターの仕事とは	14名
第2回(20名)	5月21日(土)	医師	医学とは、医師の仕事とは	20名
第3回(12名)	6月11日(土)	大学職員	大学で働く	12名
第4回(16名)	7月16日(土)	建築士	建築デザイナーの仕事とは	16名
第5回(23名)	10月8日(土)	コンサルタント	コンサルタントの仕事とは	23名
第6回(17名)	10月17日(月)	CA	客室乗務員の仕事とは	17名
第7回(17名)	11月12日(土)	早稲田大学政治経済学部4年生	公認会計士試験について	17名
第8回(8名)	12月10日(土)	公務員	環境省について	8名

2.3 行事

2.3.1 稲稜祭

2021年度は緊急事態宣言の発出など感染状況の悪化により、対面による開催内容を縮小し、オンデマンド動画によるクラス企画と人数制限をかけたステージ発表を非公開（学院生・教職員のみ）で行うにとどまった。

今年度は対面による教育活動をできるだけ取り戻すべく、感染状況を注視しつつも、稲稜祭も従来同様の開催形態で実施できるよう準備を進めた。

結果的には、クラスの屋台による食品販売こそできなかったものの、それ以外についてはコロナ禍前の稲稜祭とほぼ同程度の規模・内容で対面かつ制限なしの一般公開により開催することができた。昨年度オンラインで行った中夜祭、後夜祭についても校舎前（アプローチ広場）に全学院生が集う形式で実施し、3年ぶりとなる校歌斉唱がかなったことも大きな成果であった。長引くコロナ禍により、従来の稲稜祭を知る学院生は卒業することとなった。これにより引き継がれてきたノウハウの断絶が課題であったものの、稲稜祭の再興を成し遂げることができたのは実行委員会をはじめとする学院生の努力のたまものといえよう。天候に恵まれたことも幸いし、初日（土曜日）1692人、2日目（日曜日）2857人、延べ4549人の来場があった。過去にない盛況であったといえる。なお、一般公開としたため、昨年度行ったライブ配信・オンデマンド動画配信は行わなかった。

その他今年度の成果としては、運営の効率化や予算の削減を進めたことが挙げられる。公認団体に交付する稲稜祭用の装飾費予算を廃止したことで事務作業量を減らすことができた。また、教室の机・イスの管理ルールを変更したことにより、終了後の後片付けの時間も大幅に短縮された。パンフレットの印刷業者の変更、電気工事や展示の業者委託の廃止等により予算の削減にも成功した。

残された課題としては、食品販売（屋台）の再開、LHRを活用したクラス企画検討時間の確保、ステージ企画に出演する有志団体の演目の多様化、校内装飾の際の壁面塗装破損防止策などが挙げられる。



後夜祭のフィナーレで色とりどりの紙飛行機を飛ばす学院生

2.3.2 体育祭

本年度は新型コロナウイルス感染症予防を考慮し、従来の陸上競技中心のスタイルを変更し、学年別で3会場に分散して団体種目のみの体育祭を行った。クラス全員リレー・台風の日・綱引き・大縄跳び・玉入れ・ムカデリレーの6種目を行った。クラスが一体となる学校行事を開催することができた。

2.3.3 球技大会

10月13日(木)に第1・2学年で実施した。男子がソフトボールとサッカー、女子がバレーボール・ドッチビーを行なった。クラスの団結力が見られた有意義な時間であった。

2.3.4 マラソン大会

例年12月冬休み前の日に行っているが、本年度も新型コロナウイルス感染症予防のため、大会は中止とした。代替措置として体育授業時に実施した記録を持ち寄り、学年別男女別で順位を決め表彰した。

2.3.5 人権教育

本年度の人権教育講演は2月16日(木)LHRの時間を活用し、第2学年を対象に実施した。埼玉弁護士会森田智博弁護士(コモンズ法律事務所)が「人権課題としてのヤングケアラー問題と支援策」をテーマとする講演を行った。

ヤングケアラーの問題について、近年の動向や具体的事例、子どもの人権から見た問題のとりえ方など多岐にわたる解説があった。

2.3.6 芸術鑑賞教室

11月2日(水)に、本庄市民文化会館で実施した。3年生が校内で試験を実施するため、1、2年生のみ参加となった。演目は、「落語」(林家はな平(落語家)、林家つる子(落語家)、柳家左ん坊(落語家)、鏡味仙成(太神楽)、井上りち(お囃子))で、約1時間半程度鑑賞した。鑑賞の際はマスクを着用していたが、笑い声や歓声が沸き上がる盛り上がりを見せた。コロナ渦でイベントが少ない中、生徒が楽しい時間を過ごす貴重な時間となった。

2.3.7 早慶野球戦観戦

例年、5月末に行われる六大学野球リーグ最終戦(早慶戦)の応援に第1学年行事として参加していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により2年間観戦できなかったため、本年度は全学年で参加となった。当日は気温が高く、複数名体調が優れない生徒が出たが、養護教諭同伴の上で休憩を取り、大事には至らなかった。

試合には敗れたが、学校全体での応援となり、例年以上に大いに盛り上がりを見せた。試合後には、球場全体で早慶のエール交換を行い、早稲田としての一体感を感じる有意義な行事となった。

2.3.8 秋の学年行事

第1学年

10月14日(金)、長野県小諸市と軽井沢町への校外学習を実施した。クラスごとに観光バスで移動した。小諸ではりんご狩りをした。長野県特産で旬を迎えたリンゴは大変瑞々しく、生徒たちは大きな口ではおぼって楽しんだ。軽井沢町では自由行動とし、歴史を感じる街の散策を楽しんだ。非日常を楽しむ大変充実した一日となった。

第2学年

10月14日(金)、長野県善光寺への校外学習を実施した。例年1年次に行なっていた秋の校外学習であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止となった。今年度秋季は落ち着きを見せていたため、2年次に実施することとなった。前半はガイド付きで本堂の見学と胎内巡りをし、後半は善光寺周辺を自由散策し、大いに楽しんだ一日であった。

2.3.9 健康教育

【第1学年】

6月9日(木)「こころの健康について」榎木啓二先生(大学学生相談室)

【第3学年】

7月14日(木)「依存症の実態と予防」瀧村剛先生(久里浜医療センター)

例年、各学年に1回、講師を招いて心身の健康に関する講演を実施している。コロナ禍はオンラインで実施することもあったが、今年度は稲稜ホールにて、対面で実施することができ、生徒の反応を実感できる講義となった。講師の先生には、講演後に生徒の質問や相談にのっていただき、有意義な機会となった。

2.3.10 交通安全等講話

4月11日(月)に、第1学年オリエンテーションの一環として、「交通安全防犯講話」を実施した。

本庄警察署員による講話で、交通課の方からは主に自転車の安全走行や登下校中の防犯に関するお話を、生活安全課の方からはSNSでの犯罪やトラブルに関する内容について、映像も交えた話をしていただいた。近年、自転車通学の生徒は減少しているが、自らが加害者にも被害者にもなり得ることを踏まえ、継続して交通安全への啓発を行なっている。生徒の受講態度も良く、交通安全への啓発を効果的に行なうことができた。

2.4 課外活動

2.4.1 生徒会活動

コロナ禍が収束しない中、対面による活動をできるだけ再開するよう引き続き務めた。新入生オリエンテーションにおける部活動紹介、文化部合同発表会、3年生を送る会などのイベントも従来に近い形で開催できるようになった。稲稜祭では生徒会執行部によるキャンパスツアーも再開し、多くの参加者を集めていた。恒例の生徒会誌は1月に発行し、全学院生に配付したほか、2023年度新入生にも配付される予定である。

例年実施してきた赤十字血液センターの献血バス配車による献血の企画が、感染状況の悪化により中止になってしまったことは残念であった。

また、本庄市による市内高校合同文化祭「七高祭」にも執行部を中心とする学院生が運営メ

ンバーとして参加した。

2.4.2 部活動

文化部門 22、体育部門 15 のクラブが活動した。

クラブの活動目的は心身の成長を目指すもの、より上位の大会での成果を目指すもの、稲稜祭での発表に力を注ぐもの、部員の親睦を図るものなど異なるが、コロナ渦で様々な制限のある中で各クラブはそれぞれの目的に向かって活発に活動した。

本年度も埼玉県学事課から示される指針を参考に、学内ガイドラインを定め、それに準じた活動となった。具体的には、練習時間の短縮や活動回数制限、終日活動の禁止等で、昨年度よりは緩和することはできたが、通常活動と比べるとまだ制約の厳しい1年となった。

昨年度中止となった全国大会につながる高体連や高文連の大会は、無観客試合が多いものの本年度は開催され、全国大会に陸上部、スキー部、囲碁将棋部が出場、関東大会にソフトテニス部が出場するなど多くの活躍がみられた。

文化部でも、有観客での校内発表が難しい中、オンライン発表等の工夫を凝らして多くの発表を行うことができた。

2.4.3 プロジェクト活動

2022 年度より、公認プロジェクト活動の制度ができた。これは、課外活動に対する学院生のニーズが多様化していることに応え、部活動にない活動に取り組む有志団体について、顧問の指導のもとで充実した活動ができるよう新たに設けた公認制度である。

2022 年度は、国際交流プロジェクト、地域連携プロジェクト、企業連携プロジェクト、附属連携プロジェクト、科学未来館連携プロジェクトの 5 団体が公認され、活動を行った。



地域連携プロジェクト「地域農業・JA との連携」



企業連携プロジェクト「ほわフェスタ
(JR 本庄早稲田駅との連携で上越新幹線開業 40 周年記念式典をコーディネート)」

2.4.4 科学教育課外プログラム

(ア)「これがサイエンスだ！」特別講義

本学院教員による特別講義「これがサイエンスだ！」を、以下の内容で実施した。昨年度は完全オンラインでの実施であったが、今年度は対面で実施した。この講座は、毎年数回、生徒たちに対して科学に興味を持つきっかけになることを目的に実施している。

第1回「統計学を使ってみようーレクチャー動画の活用ー」(数学科：峰真如教諭)

第2回「多変数連立代数方程式の解法と応用 ~グレブナー基底で遊んで みよう~」(数学科：太田洋平教諭)

第3回「数値解析入門」(数学科非常勤講師：佐藤慧教諭)

第4回「音にまつわる数学」(数学科：成瀬政光教諭)

第5回「遊園地の行列」(数学科：成瀬政光教諭)

第6回「量子論って何だろう？」(本庄学院生：蔦木新太さん、指導：峰真如教諭)

* 第5回の講義は3年A組24番中村琉果さんが設計しました。

アーカイブ配信

「Geogebraの使い方講座」(数学科：太田洋平教諭)

「数学と双対性-射影幾何学と双対原理-」(数学科：太田洋平教諭)

(イ) 河川研究班の活動

河川研究班の活動は、2009年に開始された。当時本庄市・早稲田大学榊原研究室が進めていた元小山川の河川環境改善活動に載る形で、当時のSSHプログラムの1つとして実施された。2012年には同様に河川環境保護活動を行っていた本庄市立藤田小学校と連携し、年2回の合同河川調査と年8回の5・6年生の総合学習の授業を本校生徒が受け持つこととなった。河川研究班は部活動ではない。この活動に興味を持つ生徒を毎年新年度に募集し、10~15名の生徒で活動している。多くの生徒は3年間継続する。

2022年度はコロナの影響がまだ残り(小学校側の要請)、合同河川調査は11月の1回(春は雨天のため中止)、授業は5回実施したがそのうち2回が教員による講義である(感染拡大による)。感染への配慮から、児童間の距離がとれるように体育館で授業を行った。



元小山川における藤田小との合同河川調査



学院生による出前授業の様子

なお、河川研究班の活動のポイントの1つは、河川環境保護に関わる市民シンポジウムを中心とした広報・啓蒙活動である。3月11日（土）13時～14時半に早稲田国際リサーチパークで「川のシンポジウム」を実施した。昨年に続き、三重大附属小にも参加していただき、またタイのチャオプラヤ川についてタイから Thanaphat Sinthawashewa 氏による報告を得ることができた。

また、コロナ禍が始まった2020年に開始した図鑑「ほんじょうの川のいきもの」が第14回いい川・いい川づくりワークショップで評価を受け、長年にわたる地道な活動が評価され、いい川技術賞を受賞した。



「川のシンポジウム」での藤田小の発表



第 14 回いい川・いい川づくりワークショップ審査の様子

(ウ) 古墳の物理調査

早稲田大学の考古資料館や本庄市、高エネルギー加速器研究機構、大阪大学、総合研究大学院大学の研究者や大学院生と連携して、生徒が学校の周りにある古墳を地中探査レーダーや宇宙線(宇宙から降り注ぐ放射線)を用いて内部を透視しようというプロジェクト「墳 Q」を実施している。

4 月 27 日(月)に生徒と研究者が共同で開発を進めてきた宇宙線透視装置 OSECHI を用いて、本庄市の秋山庚申塚古墳を測定を行った。この活動は、ほんじょう FM や本庄ケーブルテレビでも紹介された。また、5 月 29 日(日)に早稲田大学戸山キャンパスにて行われた日本考古学協会第 88 回総会高校生ポスターセッションにて成果報告を行った。((K04) 宇宙線・地中探査レーダーを利用した本庄市の古墳透視プロジェクト「墳 Q」)



秋山庚申塚古墳での測定の様子



日本考古学協会第 88 回総会での生徒発表の様子

2.5 国内外交流・研修

2.5.1 修学旅行

修学旅行は新型コロナウイルスの影響により、20、21 年度と中止となっていた。しかし、今年度は実施日を 10 月 11 日（火）～10 月 14 日（金）の 3 泊 4 日、行き先を広島・神戸、関西、北陸の国内 3 コースとし、保険を手厚くして貸切バス乗車人数を定員の約半分とする等のコロナ対策を行って、3 年ぶりに修学旅行を実施することができた。

生徒に 4～8 名の班を作らせて班ごとに参加コース希望調査を行ったが、緊急対応に備えてコースごとの引率教員数を揃えるため抽選による人数調整を行い、広島・神戸コース 99 名、関西コース 120 名、北陸コース 91 名とした。後日、部活動大会結果等で不参加者 21 名が出たことにより、結果として広島・神戸コース 86 名（男 47・女 39）、関西コース 114 名（男 53・女 61）、北陸コース 89 名（男 50・女 39）での実施となった。

広島・神戸コースは、厳島神社、広島市内（平和記念公園ほか）、姫路城、六甲山、神戸市内自主研修、嵐山など、関西コースは、清水寺、選択プラン（大原、比叡山、平等院）、大阪市内自主研修、神戸市内（散策、クルーズ船）、北陸コースは、立山黒部アルペンルート、瑞龍寺（高岡市）、白川郷、九谷焼絵付け体験、金沢市内自主研修、能登（遊覧船、水族館）など、といった見学・体験を行った。いずれのコースも班別自由行動日が設定されており、生徒たちは班別に事前調査した行程で自主研修を行った。

今年度の第 3 学年（39 期生）は、学院入学以来多くの学校行事に制約がかかり、とりわけ部活動合宿などの宿泊を伴う行事を経験できずに過ごしていたため、多くの生徒たちにとって修学旅行は待望の行事であったことは、事後アンケート結果からも窺えた。班を作らせる方法や時期、コースごとの指導の統一性、食事や宿泊設備など、次回に向けて改善すべき点もあったが、従来と異なる形態で手探りの中で実施した修学旅行ながら、生徒の満足度の高い行事となったといえよう。

2.5.2 海外からの訪問

2022 年度は海外交流校から生徒グループを迎えるには至らなかったが、次年度以降の相互訪問を視野に入れた視察と日本の教育環境の事例を知るための視察があった。いずれも教員および関係組織のメンバーによる視察である。

① タイ Mahidol Wittayanusorn School (MWIT) 視察グループ（10 月 29 日）

校長および理系分野の学術交流に関わる教員が来校され、国際交流再開について懇談した。この懇談を踏まえ、同校主催の高校生サイエンスフェア参加を目的としたタイ研修を 2 月 12～18 日に実施した。

② フィンランド協会 視察グループ（11月9日）

川口フィンランド協会の紹介で、日本フィンランド協会の有識者とフィンランド野球が盛んな自治体の代表者が日本の高校での野球の事情を知るために来校され、野球部員が対応した。



シートノックのデモンストレーション



視察グループと本庄メンバー

2.5.3 留学

（ア）長期留学生の受け入れ

今年度は3名の長期留学生を受け入れた。2年生2クラスと1年生1クラスとが受け入れクラスとなり、それぞれの言語レベルと興味関心に応じて所属クラスの通常授業および他学年・他クラスの授業を組み合わせた個別の時間割を作成して学習支援を行った。3人は部活動や学校行事に参加するほか、地域の国際理解を深める企画や日本文化を知るためのフィールドワークに参加した。在校生にとって複数の長期留学生と接するインパクトは大きく、クラスや部活動で仲間として接する経験をしたり、留学生が活動の幅を広げていく様子を目の当たりにして敬意と憧れの気持ちをいだくなど、好影響がみられた。また、授業や部活動に関わる教職員も増えたことで、支援や指導の方法などで意見交換をする機会も増え、留学生の個性を大事にしながら正規学生と一緒に育成していく気風が醸成されつつある。留学生個々の状況は以下の通りである。

① DENINNG, Frida Henrike さん（ドイツ出身、4月1日～1月13日在学、ホームステイ）

- ・支援団体：ILS
- ・所属学年：2年生（担任の担当教科は数学）
- ・学習支援：受け入れクラスの通常授業、3年生選択科目、同学年他クラスの組み合わせ
- ・言語支援：担任による配布物のDeepL翻訳、機械翻訳ソフトUDトークを活用
- ・部活動等：ダンス研究会に所属
- ・発表活動、コミュニティへの貢献等：地元ラジオ「ほんじょう FM くまごじ」出演、地元小学校での国際理解授業参加、Waseda English Kids、立命館高校主催 International Collaboration Research Fair オンライン参加（1月28日、帰国後）等

② RAGACHAA Enerel さん（モンゴル出身、6月27日～3月10日在学、寮生）

- ・支援団体：AFS 群馬支部（アジア高校生架け橋プロジェクト 第5期生）
- ・所属学年：1年生（担任の担当教科は英語）
- ・学習支援：受け入れクラスの通常授業、同学年他クラスの組み合わせ
- ・言語支援：AFS 群馬支部メンバーによる定期的な日本語補習。滞在中に日本語検定 N2 取得。

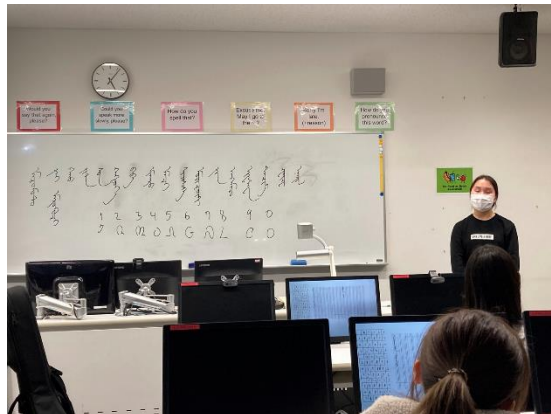
- ・部活動等：茶道部、應援部に所属
- ・発表活動、コミュニティへの貢献等：地元ラジオ「ほんじょう FM くまごじ」出演、地元小学校での国際理解授業参加、Waseda English Kids、学内でのミニ講演会開催（2月16日、モンゴルの言語と文字のワークショップ）應援部員として「新入生のつどい」補佐

③ 田 黄 (TIEN, Huang)さん（台湾出身、9月1日～2023年7月15日在学、寮生）

- ・支援団体：日本台湾交流友好協会
- ・所属学年：2年生（担任の担当教科は数学）
- ・学習支援：受け入れクラスの通常授業、3年生選択科目
- ・言語支援：特になし（日本語・英語とも学校生活が可能なレベル）
- ・部活動等：書道部、硬式テニス部に所属
- ・発表活動、コミュニティへの貢献等：全日本学生美術展特選受賞、地元小学校での国際理解・英語学習支援授業等参加、Waseda English Kids、書道部メンバーとして、本庄早稲田駅での上越新幹線開通40周年記念行事「ほわフェスタ」に参加。



エネレルさんによるモンゴル文字のミニ講義



参加者の名前と数字をモンゴル文字で表記



Waseda English Kids

（イ）「荻野奨学金」を活用した受入留学生支援（第二年次）

本学院は、早稲田大学で学ぶ留学生の学習支援のための指定寄付「荻野奨学金」を活用する箇所の1つとして選ばれ、21年度から25年度までの5ヶ年間に受け入れる留学生の学習、および留学生と在校生との共同学習にこの奨学金が使えるようになった。

活用初年度に、留学・交流委員会で活用ガイドラインを作成し、使用目的が

- A. 留学生が日本および学校生活のルールや慣習を理解し、大きな支障なく心身ともに健康に滞在できるための支援
- B. 留学生が日本語を学び、高校生の生活をより深く理解するための支援（公立学校や早稲田大学訪問、部活動大会の参加支援などを含む）
- C. 留学生が日本の風土・文化・芸術・歴史や現代社会の動き等を、学院生と共に学ぶための支援

に原則として該当するものに支出するとした。22年度の活用事例と成果は以下の通りである。活用事例の対象留学生は個人差があるが、使える言語の違いや個々の興味関心、在学時期の違いなどに因るものである。

- ① UD トーク（音声言語の翻訳字幕自動作成アプリ）教育機関向けプラン契約料（目的 A、B）
留学生が滞在期間中に可能な限り通常授業に参加できるようにするため、言語支援を目的として導入した。22年度はフリーダ・デニングさんが活用した。
- ② 「DeepL」（機械翻訳プログラム）使用料（目的 A）
主に LHR での連絡・周知事項を英語で機械翻訳し、正規学生との情報ギャップに起因する学院生活でのトラブルが起きないように配慮した。22年度はフリーダ・デニングさんの担任が活用し支援を行った。
- ③ 学年行事（バス旅行）参加経費（目的 B、C）
秋のバス遠足に所属クラスのメンバーと共に参加するための経費を支出した。22年度は3名全員が対象となった。
- ④ 在校生との共同学習プログラム「バスツアー」実施（目的 C）
本庄および周辺地域の風土と産業を留学生と在校生が共に学ぶ機会として、『旧街道の宿場町をめぐるバスツアー』を7月22日に実施した。フリーダさん、エネレルさんと9人の在校生が参加し、中山道の宿場町だった軽井沢と、北国街道の宿場町の海野宿（長野県東御市）を訪問。江戸後期から明治時代の宿場町の建物が保存されている海野宿と、宿場町から明治に日本に滞在した欧米人の避暑地を経て今も観光地・避暑地として人気の高い旧軽井沢を見学しました。

海野宿では海野宿トラスト理事長の宮下さんにガイドをつとめていただいた。参加者は平安時代にさかのぼる歴史を持つ白鳥神社から出発し、江戸期の宿場町の街割りと旅籠屋建築、明治期の蚕室建築の特色を学んだのち、海野宿の風景のスケッチをした。



海野宿白鳥神社にて（フリーダさん）



海野宿にて（エネレルさん）

⑤ 早稲田大学および日本文化体験フィールドワーク実施（目的 C）
世話役教員が留学生の日本文化・社会への関心時を聞き取り、京都等へのフィールドワークを実施した。

留学生の支援のおよび活動の紹介は、世話役教員や留学生自身による学院ホームページへの以下の寄稿で発信した。留学生の母国や国内外への広報を意図し、可能な限り留学生の母語と日本語または英語で掲載をしている。

- － Waseda English Kids を開催しました！（11月18日掲載）
- － 田黄さん、Waseda English Kids でボランティアを務める！ 早稲田英語児童は田黄在留學期間的第一項志工活動！（10月19日掲載）
- － エネレルさんが、小学校で講師を務めました！ Р. Энэрэл бага сургуульд сургалт тавив！（10月3日掲載）
- － エネレルさんがほんじょう FM のパーソナリティを務めました！ Хонжо FM-ын нэгэн удаагийн дугаарт Р. Энэрэл оролцлоо. （9月16日掲載）
- － 留學生田黄體驗葡萄採摘！（雙語）（9月16日掲載）
- － Frida さんが本庄西小学校で授業を行いました！（9月11日掲載）
- － 【3 Languages】 Frida Visits a Soy Sauce Manufacturer （5月23日掲載）
- － ほんじょう FM「くまごじ」開始 （4月24日掲載）



くまごじ収録の様子（一番奥、エネレルさん）

（ウ）短期海外派遣・研修活動

新型コロナ感染状況や各国の出入国ガイドライン、および他校の動静等をみて、教諭会で2023年1月以降の生徒海外研修派遣の解禁を決定した。2022年中から関係者間で準備を進め、学校として関わる3つの海外プログラムを実施した。

① タイ研修（2月12日～18日）：

生徒6名派遣。姉妹校であるタイ Mahidol Wittayanusorn School 主催世界最大規模の高校生国際科学シンポジウム Thailand International Science Fair に参加。3人一組の2チームが参加し、1チームの研究発表が Most Innovative Award を獲得した。



② Kia Ora Program（3月18日～31日）：

本庄生徒29名、高等学院生徒13名派遣。早稲田大学と New Zealand Education との高大連携協定に基づき、国際部国際課の支援によりニュージーランドの2地域9校が受け入れ校となって両高等学院生の高校生活およびホームステイ体験プログラムを実施した。保護者と生徒の関心は高く、受け入れ枠の2倍近い応募があった。



2022 年 11 月に実施した、Kia-Ora プログラムに先立つ視察団
(@Parmaston North Girls High School)

③ アメリカ研修（3 月 19 日～3 月 29 日）：

2019 年までアメリカとオーストラリアでの研修を実施していた団体によるプログラム。シカゴとボストンで英語のトレーニングと現地の教育機関での訪問研修を実施した。



なお、今年度夏にアメリカでの実施が予定されていた AIG 高校生外交官プログラムには 1 名が合格していたが、コロナ感染状況の関係でオンライン開催となった。

（エ）留学・交流委員会（教職員）の業務

22 年度は長期留学生を 3 名受け入れることになり、委員会では受け入れクラス担任と協働支援および「荻野奨学金」の活用方法および業務分担について協議をした。年度後半は 2023 年からの生徒海外派遣再開への動きを踏まえ、具体的な実施方法や保護者・生徒の不安を軽減するための必要事項の洗い出しを行った。また 2023 年度に学術交流プロジェクトとして実施準備中の企画について、経費の出処のあり方について意見交換を行った。

（エ）在校生の長期留学

在校生の留学状況としては、第 1 種留学（休学を伴う留学）で 2 名、第 2 種留学（休学を伴わない留学）で 1 名が留学を終了し、復学した。行き先と留学期間は以下の通りである。

- ・ 第 1 種留学 フランス（2021 年 9 月～2022 年 8 月）2 年生 1 名（女子）
- ・ 第 1 種留学 アメリカ合衆国（2022 年 1 月～2022 年 12 月）2 年生 1 名（女子）
- ・ 第 2 種留学 シンガポール（2021 年 1 月～2022 年 12 月）2 年生 1 名（男子）

2.5.4 海外交流プログラム

（ア）ミニシンポジウム「国際交流へのいざない」開催

2022 年度も 2020 年 2021 年同様、対面の国際交流ができないことは年度当初に自明であった。しかしながら、本校が国際交流に熱心な学校と思って入学した生徒が多いこと、生徒たちの国際交流への興味をつぶしたくないことから、今年度もミニシンポジウム「国際交流へのい

ざない」を開催することとした。

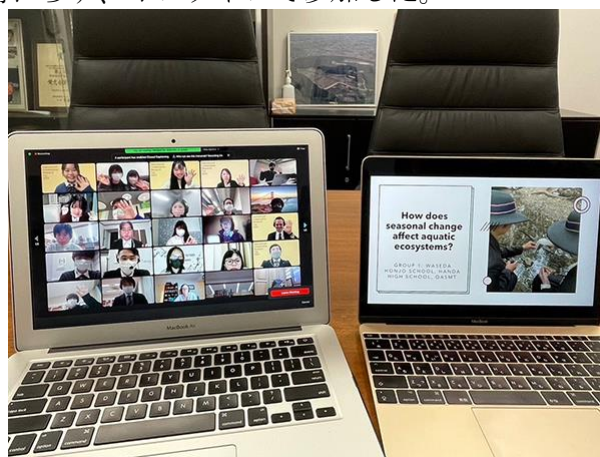
今年度は新入生を主対象に 3 月 30 日（水）に実施した。どうせならば学校の様子を理解してもらうため、保護者の参加も認めたいと考え、19 時～20 時の時間帯で Zoom により実施した。在校生・新入生・保護者を含め 180 人が参加した。

昨年 AACIS を共同開催した愛知県立半田高校、SSH 時代より交流のある茨城県の清真学園にもお願いし、教員にパネラーを務めてもらった。

（イ）ICRF

ICRF(International Collaborative Research Fair)は SSH 校である立命館高校が主催し、2022 年度より開始した、オンラインの国際高校生科学シンポジウムである。特徴は、国内校と海外校がペアになり共同研究を半年行い、その成果を 1 月のオンラインシンポジウムで発表するというものであり、国際社会における協働力とリーダーシップ養成を SSH 事業の目標に掲げる、立命館高校の事業である。

国内 17 校、海外 16 校が 5 月にペアを組み、テーマについて検討を行い、各チームが Slack とオンライン会議で共同研究を進めた。本校は、SSH 校である愛知県立半田高校、オーストラリアの Queensland Academy for Science, Mathematics & Technology の 3 校で”How Does Seasonal Change Affect Aquatic Ecosystems?”というテーマについて取り組んだ。成果を 1 月 28 日（土）にオンラインで実施された ICRF で発表した。この活動は各校 3 名のメンバーで実施されるが、本校からはちょうど留学で本校に滞在していたドイツのフリーダさんが参加したことが特筆される。ICRF 直前のミーティング、および本番では既に帰国していたが、ドイツの現地時間では早朝にも関わらず、オンラインで参加した。



（ウ）JSSF

JSSF(Japan Super Science Fair)は SSH 校である立命館高校が主催する世界最大規模の高校生国際科学シンポジウムである。コロナ禍以前の 2019 年には、世界 30 カ国から 300 人に近い生徒が参加している。2020 年～2021 年はオンライン開催を余儀なくされた。2022 年は参加校と参加できる生徒数（3 名まで）を絞り、オンライン参加も認めるハイブリッド開催で 11 月に実施された。本校からは 3 名の生徒が参加した。

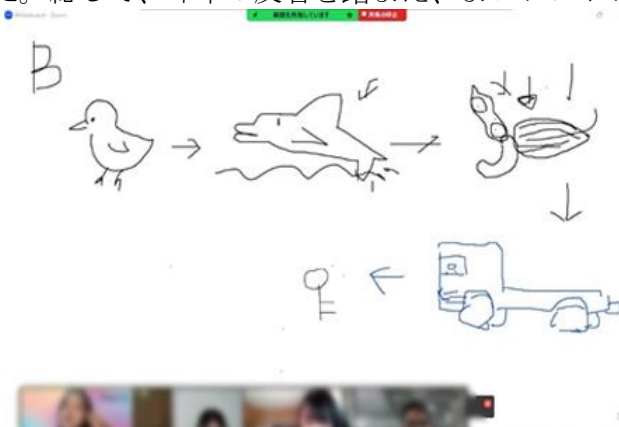


(エ) Asia Academic & Cultural Sessions(A`ACS)の開催

AACS は 2020 年、例年ならば相互訪問している NJC や MWIT との交流が途絶えてしまうことを憂えた生徒からの申し出により、昨年度開催した小さな国際シンポジウムである。MWIT の訪問時期が同時期となる愛知県立半田高校との合同主催で開催している。課外プログラムがコロナ禍で制限される中、高い達成感を経験してほしいと考え、基本的にすべて生徒のコーディネートに任せている。

対面での交流が不可能な今年度も、一昨年昨年度よりも参加校を増やす形で 1 月 15 日（日）22 日（日）10 時～13 時の日程で Zoom 開催した。参加校として、日本は茨城県の清真学園・愛知県立半田高校・早稲田本庄の 3 校、海外校はフィリピン 1 校、タイ 2 校、シンガポール 1 校、韓国 1 校、台湾 1 校の計 6 校である。

昨年は、研究発表や SDGs に関するディスカッションなど、真面目な要素が多かったが、今年度はもっと楽しめることを主眼に、学校紹介でも生徒の一日の生活の紹介、語学講座、ゲームなどの要素を増やした。総じて、昨年の反省を踏まえ、よいシンポジウムだったと思う。



AACS のアイスブレイクの様子

(オ) 韓国セロナム高校との学術交流

2021 年度の新しい試みとして始まった韓国テジョン市のセロナム高校とのオンライン学術交流を本年度も継続した。

昨年度の内容をベースに、両国の参加生徒・教員により目標や進行方法等を協議しながら決定していった。テーマは持続可能な開発目標（SDGs）に関する日韓両国の課題とし、日韓の生徒が 6 名程度のチームを組んで共同研究することになった。使用言語はすべて英語とした。

5 月頃までに打ち合わせを進め、参加生徒を募集した。希望者の中から 18 名の生徒を選抜し、6 チームに編成（マッチング）した。セロナム高校側の参加者は 21 名であった。各チームの生徒たちはチームごとに月例ミーティングを重ねながら研究を進め、オンラインによる中間報告会（9 月 14 日実施）、および最終シンポジウム（12 月 22 日）に臨んだ。ここでも各チームによる共同研究発表と質疑応答があり、教員による講評を行った。報告会・シンポジウムのツールは ZOOM を使用した。

同じアジアの高校生どうしとはいえ、言語・文化・学事日程の異なる日韓の生徒が直接顔を合わせないまま協働して研究を進めるのは容易ではない。対面での交流がかなわないなかで、生徒たちの相互理解を深める仕掛けづくりに工夫が必要である。

また、シンポジウムについては両校の生徒と教員のみが参加して行う形式をとったが、今後は広く公開することや、他校の参加についても検討したい。

2.6 高大一貫教育

2.6.1 学部説明会

大学の教育内容や研究内容を知り、ミスマッチのない進学をさせるために、各学部の入試担当者による説明を開催している。日本医科大学にも推薦できるため、日本医科大学での説明会も開催した。

早稲田大学

学部	日時
政治経済学部	7月13日
法学部	7月14日
文化構想・文学部	9月8日
教育学部	6月8日
商学部	6月15日
基幹理工学部	7月13日
創造理工学部	
先進理工学部	
人間科学部	7月6日
スポーツ科学部	7月6日
国際教養学部	9月15日

日本医科大学 9月19日 説明会（日本医科大学千駄木キャンパス）

また、学部説明会は本学院が計画実施しているイベントであるが、学部側からも積極的に学部理解を深めることを目的として、本学院に向けた説明会が開催されている。2022年度実施されたものとしては以下の通りである。

- ・ 9月7日（水）15:00～17:30「社会科学部説明会」
学院生・保護者対象
- ・ 9月11日（日）15:00～17:30「法学部への招待」
学院生・保護者対象

2.6.2 学部開放科目（高校生特別聴講制度）

高校生特別聴講制度とは、大学生と一緒に、早稲田大学の正規授業を受講できる制度である。早稲田大学では、全国の高校生のために、学問への関心や進路決定の手助けになるように、正規授業を高校生へ開放している。

附属校である本学院は、授業料を全額免除になるほか、取得した単位は大学での正規の単位として認定されるため、大学教育の先取りとなっている。

〔受講期間〕 9月下旬～1月（週1回90分）

〔受講費用〕 無料（実習を伴う科目は実習料が必要）

〔受講場所〕 早稲田大学各キャンパスまたはオンデマンド（受講科目による）

〔開講科目〕 以下の表の通り

No.	箇所名	科目名	教員名	学期	単位数	キャンパス	募集時期	備考
50	グローバル	数学基礎プラス γ (解析学編) 01	高木 悟 他	夏クォーター	1	-	春	
51	グローバル	数学基礎プラス γ (解析学編) 02	高木 悟 他	秋クォーター	1	-	夏	
52	グローバル	Introduction to University Mathematics (Calculating Interest) A 01	曾布川 拓也	春クォーター	1	-	春	
53	グローバル	Introduction to University Mathematics (Calculating Interest) A 02	曾布川 拓也	秋クォーター	1	-	夏	
54	グローバル	Introduction to University Mathematics (Calculating Interest) B 01	曾布川 拓也	夏クォーター	1	-	春	
55	グローバル	Introduction to University Mathematics (Calculating Interest) B 02	曾布川 拓也	冬クォーター	1	-	夏	
56	グローバル	Introduction to University Mathematics (Optimization Problem) A 01	曾布川 拓也	春クォーター	1	-	春	
57	グローバル	Introduction to University Mathematics (Optimization Problem) A 02	曾布川 拓也	秋クォーター	1	-	夏	
58	グローバル	Introduction to University Mathematics (Optimization Problem) B 01	曾布川 拓也	夏クォーター	1	-	春	
59	グローバル	Introduction to University Mathematics (Optimization Problem) B 02	曾布川 拓也	冬クォーター	1	-	夏	
60	グローバル	視覚的に捉える群論入門 01	高木 悟	夏クォーター	1	-	春	
61	グローバル	視覚的に捉える群論入門 02	高木 悟	冬クォーター	1	-	夏	
62	グローバル	素数の魅力と暗号理論	野口 和範	秋クォーター	1	-	夏	
63	グローバル	データ科学入門 α 01	小林 学 他	春クォーター	1	-	春	※附属校のみ開放
64	グローバル	データ科学入門 α 02	小林 学 他	夏クォーター	1	-	春	※附属校のみ開放
65	グローバル	データ科学入門 α 03	小林 学 他	秋クォーター	1	-	夏	※附属校のみ開放
66	グローバル	データ科学入門 α 04	小林 学 他	冬クォーター	1	-	夏	※附属校のみ開放
67	グローバル	データ科学入門 β 01	野村 亮 他	春クォーター	1	-	春	※附属校のみ開放
68	グローバル	データ科学入門 β 02	野村 亮 他	夏クォーター	1	-	春	※附属校のみ開放
69	グローバル	データ科学入門 β 03	野村 亮 他	秋クォーター	1	-	夏	※附属校のみ開放
70	グローバル	データ科学入門 β 04	野村 亮 他	冬クォーター	1	-	夏	※附属校のみ開放
71	グローバル	Introduction to Data Science α 01	堀井 俊佑 他	春クォーター	1	-	春	
72	グローバル	Introduction to Data Science α 03	堀井 俊佑 他	秋クォーター	1	-	夏	
73	グローバル	Introduction to Data Science β 03	堀井 俊佑 他	秋クォーター	1	-	夏	
74	グローバル	潜在構造のデータ科学 01	野村 亮 他	春クォーター	1	-	春	
75	グローバル	潜在構造のデータ科学 02	野村 亮 他	夏クォーター	1	-	春	
76	グローバル	潜在構造のデータ科学 03	野村 亮 他	秋クォーター	1	-	夏	
77	グローバル	潜在構造のデータ科学 04	野村 亮 他	冬クォーター	1	-	夏	
78	グローバル	情報科学の基礎 01	中村 優一 他	春クォーター	1	-	春	
79	グローバル	情報科学の基礎 03	中村 優一 他	秋クォーター	1	-	夏	
80	グローバル	プログラミング入門 01	細谷 剛 他	春クォーター	1	-	春	
81	グローバル	プログラミング入門 03	細谷 剛 他	秋クォーター	1	-	夏	
82	グローバル	Introduction to Programming 01	齋藤 恵 他	春クォーター	1	-	春	
83	グローバル	Introduction to Programming 03	齋藤 恵 他	秋クォーター	1	-	夏	
84	グローバル	プログラミング初級(C/C++) 01	齋藤 恵 他	春クォーター	1	-	春	
85	グローバル	プログラミング初級(C/C++) 03	齋藤 恵 他	秋クォーター	1	-	夏	
86	グローバル	プログラミング初級(Java) 01	細谷 剛 他	春クォーター	1	-	春	
87	グローバル	プログラミング初級(Java) 03	細谷 剛 他	秋クォーター	1	-	夏	
88	グローバル	カーボンニュートラルと社会(学部生用)	有村 俊秀 他	春クォーター	1	-	春	

2) 高校生特別聴講制度開放科目

2022年1月21日現在

No.	箇所名	科目名	教員名	学期	単位数	キャンパス	募集時期	備考
1	法学	総合講座「法批判への招待」	弓削 尚子 他	秋学期	2	早稲田	夏	
2	法学	総合講座「ドイツ語圏を知る」	岡山 具隆 他	春学期	2	早稲田	春	
3	法学	総合講座「ことばと法・社会」	星井 枚子 他	秋学期	2	早稲田	夏	
4	法学	導入講義(選択) ―法曹の仕事を知る―	白石 大	春学期	2	早稲田	春	
5	法学	先端科学技術と法入門	肥塚 肇雄 他	秋学期	2	早稲田	夏	
6	教育	図書館概論 A	雪嶋 宏一	春学期	2	早稲田	春	
7	教育	地球生命史	川辺 文久	春学期	2	早稲田	春	
8	商学	ビジネス入門 1	山野井 順一 他	春学期	2	-	春	※附属・系属校のみ開放
9	文構	ギリシャ・ローマ世界入門	宮城 徳也 他	春学期	2	-	春	
10	文構	日本史・世界史再発見	小田 章 他	春学期	2	-	春	
11	文構	言語学入門	森田 彰	春学期	2	早稲田	夏	
12	文構	ヨーロッパのことばと文化	酒井 智宏	秋学期	2	戸山	夏	
13	文構	オペラ論	村井 翔	秋学期	2	-	夏	
14	文構	精神分析入門	村井 翔	春学期	2	-	春	
15	文構	現代文芸・文化論1	市川 真人	春学期	2	戸山	春	
16	文構	現代文芸・文化論2	市川 真人	秋学期	2	戸山	夏	
17	文構	日常生活の社会学	大久保 孝治	春学期	2	-	春	
18	文	初級ギリシャ語(速修)	栗科 琢也	春学期	4	戸山	春	
19	文	初級ラテン語(速修)	小倉 博行	春学期	4	戸山	春	
20	文	ギリシャ・ローマの思想と文化	宮城 徳也 他	秋学期	2	-	夏	
21	文	心理学概論1	小塩 真司 他	春学期	2	-	春	
22	文	心理学概論2	福川 廣之 他	秋学期	2	-	夏	
23	文	日本考古学概説	長崎 潤一 他	春学期	2	-	春	
24	文	人文地理学1	本木 弘徳	春学期	2	-	春	
25	基幹	基礎の数学 基幹(2)-II	奥村 克彦	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
26	基幹	基礎の数学 基幹(4)-II	木村 晃放	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
27	基幹	数学A2(線形代数) 基幹(6)	柳谷 晃	通年@秋期	5	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
28	基幹	Cプログラミング入門 基幹(3)	吉岡 剛志	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
29	基幹	Cプログラミング入門 基幹(7)	寺田 晃太郎	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
30	基幹	Cプログラミング 基幹(5)	金井 謙治	秋学期	2	西早稲田	夏	※附属・系属校のみ開放 ※「Cプログラミング入門」の習得が前提条件
31	創造	建築意匠と歴史	小岩 正樹/石谷 誠章	春学期	2	西早稲田	春	
32	先進	力学A 電生	山田 卓一	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
33	先進	力学B 電生	辻川 信二	秋学期	2	西早稲田	夏	※附属・系属校のみ開放
34	先進	基礎化学A	鹿又 宣弘	春クォーター	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
35	先進	基礎化学B	石原 浩二	夏クォーター	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
36	先進	生命医科学ゼミナールI	朝日 遼 他	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
37	先進	電気・情報生命工学フロンティア	石山 敏士 他	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
38	先進	生命科学概論B 生医	井上 貴文 他	春学期	2	西早稲田	春	※附属・系属校のみ開放
39	グローバル	数学基礎プラスα(金利編) 01	高木 悟 他	夏クォーター	1	-	春	
40	グローバル	数学基礎プラスα(金利編) 02	高木 悟 他	秋クォーター	1	-	夏	
41	グローバル	数学基礎プラスα(金利編) 03	高木 悟 他	春クォーター	1	-	春	
42	グローバル	数学基礎プラスα(最適化編) 01	高木 悟 他	夏クォーター	1	-	春	
43	グローバル	数学基礎プラスα(最適化編) 02	高木 悟 他	秋クォーター	1	-	夏	
44	グローバル	数学基礎プラスβ(金利編) 01	高木 悟 他	夏クォーター	1	-	春	
45	グローバル	数学基礎プラスβ(金利編) 02	高木 悟 他	秋クォーター	1	-	夏	
46	グローバル	数学基礎プラスβ(最適化編) 01	高木 悟 他	夏クォーター	1	-	春	
47	グローバル	数学基礎プラスβ(最適化編) 02	高木 悟 他	秋クォーター	1	-	夏	
48	グローバル	数学基礎プラスγ(線形代数編) 01	高木 悟 他	夏クォーター	1	-	春	
49	グローバル	数学基礎プラスγ(線形代数編) 02	高木 悟 他	秋クォーター	1	-	夏	

[出願期間] 5月24日(月)～5月31日(月)

2.6.3 競技スポーツガイダンス

高大連携の一環として運動部生徒を対象に5月11日(水)に競技スポーツ育成の目的でスポーツ科学の基礎知識ガイダンスを実施した。早稲田における競技スポーツの持つ意義や影響について講義を行った。また、運動部サポートシステムの「リハビリコンディショニングルーム」の紹介を行った。

早稲田大学本庄高等学院卒業生の117名が早稲田大学各運動部所属し活動した。スポーツにおける高大連携の一環として競技スポーツガイダンスを今後も継続する意義は深いと考える。

2.6.4 安全配慮義務プログラム

早稲田大学本庄高等学院における「安全配慮義務」の実践プログラムとして6月9日(水)に、運動部生徒を対象に熱中症対策講座を実施した。

また、例年実施してきた「AED講習」は新型コロナ感染対策のため残念ながら中止とした。

2023 年度は従来の形式に戻し、各運動部 1 年生の参加を義務付けとし実施する予定である。
(新型コロナウイルス感染状況を考慮し参加者人数は調整することとする)

2.7 生徒指導

2.7.1 生徒指導の方針

本学院の生徒はおおむね高度な学力・理解力を有しており、また生活態度も模範的であり、深刻な生徒指導事案が起こることは稀である。とはいえ、成績不振や遅刻・欠席超過に陥るケースが全くないわけではない。対人関係のトラブル、あるいは日々ハイレベルな競争にさらされることにより精神的な不調を訴えることもある。

コロナ禍においては、感染対策により他人との交流が制限されてきた。例えば、集団感染防止の観点から、多人数での会食や旅行を控えるように要請してきた。寮生活においても他寮室の訪問を禁止している。これらによるストレスの蓄積がメンタルに与える影響を考慮し、心身の健康維持のための配慮を強く必要としてきた。

そこで、本年度は感染拡大防止を図りつつも、コロナ禍において制限されてきた諸活動を従前の形に近づけていくことに注力し、生徒指導の方針を定めた。放課後や休日における行動制限についても慎重に解除を進め、対面による生徒活動をできるだけ守れるよう指導を行った。

いじめや中傷、盗難、SNS トラブルの防止といった従来からの生徒指導目標についても達成できるよう努力を継続した。移動教室での盗難事件防止のための巡回、「いじめアンケート」の実施、集会での講話などを通じ、学院生としての矜持を高めるよう指導に努めた。次年度以降においても、いかにして学院生の満足度を高め、充実した生活を送れるようにするかが問われている。

2.7.2 2022 年度の状況

2022 年度も日々変わる感染状況を慎重に見定めつつ、新型コロナウイルス感染対策ルールを改定していった。これまで通り感染者・濃厚接触者の発生のたびに状況調査や拡大防止の対応を行った。結果的に、大規模な感染者集団の発生は起きず、寮運営も継続できた。

停学・謹慎を伴う生徒指導案件は年間で 7 件であった。定期試験における不正行為、飲酒、SNS の不適切投稿等が該当した。本年度は特に異性間の交遊関係トラブルに起因する指導案件が目立ち、停学等に至らないまでも、丁寧なフォローを要するケースが複数みられた。保健室や相談室との連携により、対処を強化していく必要性がある。

3. 生徒

3.1 生徒受入（入学試験）

3.1.1 入学試験全般（志願者数・入寮者数、出身都道府県等）

- ・ 志願者総数は 3,100 名であり、一般・帰国生入試では、東京都の男子が増加した一方で、女子は減少した。千葉県は微増となった。
- ・ 入学予定者 324 名で、男子 177 名（54.6%）、147 名（45.4%）である。
- ・ α 選抜では、志願者数が大幅に減少し（前年度比－26 名）、女子の減少が目立った。
- ・ I 選抜の志願者数は、前年度比＋8 名となった。前年度よりは若干増加したものの、2 年度前の 2020 年度入試の志願者数と比べると、依然コロナ禍による影響を受けているといえる。
- ・ 帰国生入試・I 選抜を合わせた志願者数は 259 名で、前年度比－12 名となった。
- ・ 学院説明会は、第 1 回～第 3 回の全ての回で対面（オンライン併用）にて開催した。全 3 回を対面で実施したのは 2019 年度以来、3 年ぶりとなった。

全体	埼玉県	東京都	神奈川県	千葉県	群馬県	他道府県	海外
2022 年	122	98	20	13	22	22	27
2023 年 (324 名)	123	89	19	25	22	16	30
	38.0 %	27.5 %	5.9 %	7.7 %	6.8 %	4.9 %	9.3 %

3.1.2 広報・学校説明会

- ・ 学院説明会は 2019 年度以来、全ての回を対面で行うことができた。また、2021 年度・2022 年度に得たノウハウを活用し、全てオンラインも併用して実施した。これにより、海外に住む受験生にも本学院の情報にアクセスする機会を増やすことができたと考えられる。なお、動画配信は定員を設けず、対面参加者も動画配信を視聴できることとした。
- ・ 遠方になるほど動画配信のみでの参加者が多くなり、特に海外在住者は参加者の 9 割以上が動画での配信での参加となった。
- ・ コロナ禍以降初となる海外在住者向け学校説明会を、8 月の 4 日間で計 8 回実施した。
- ・ 4 つの外部の説明会・相談会に参加し、全体説明および個別相談を行った。

3.1.3 入試実施体制

2021 年度入試より、一般指定校推薦では各国の新型コロナウイルス感染症の水際対策を理由とし「試験に伴う出国・帰国がその後の受験者の日常・学校生活に大きな支障をきたす可能性が高い」受験生のオンライン面接を認めているが、2023 年度入試では該当者はいなかった。

3.1.4 入学試験

(ア) 一般入学試験・帰国生入学試験

一般男子 95 名、一般女子 80 名、帰国生男子 7 名、帰国生女子 5 名となった。

(イ) α 選抜（自己推薦入試）

志願者数は昨年度よりも減少し、230 名であった。男子 97 名、女子 133 名となった。

(ウ) I 選抜（帰国生自己推薦入試）

志願者数 81 名で、合格者 21 名となった。

3.1.5 指定校推薦

一般指定校からの入学者は男子 11 名、女子 16 名（指定 31 校中）となった。

地元指定校からの入学者は男子 6 名、女子 8 名となった。

3.2 入学決定者の集い

2 月 18 日（土）2019 年以來はじめて対面で実施した。毎年、入学手続き者がある程度確定した土曜日に入学希望者を集めて、教員からの挨拶、国数英主任からのアドバイス、生徒によるミニコンサート、校歌歌唱指導、應援部からのエールの内容で実施しているイベントである。

今年度は、教科主任からのあいさつの代わりに、家庭科と世界史の模擬授業を行った。終了後に参加者に集いの感想を記述式アンケートで求めた結果、大多数の生徒から本学院への入学の期待と、勉強する意欲が増したという回答を得た。事務的な連絡等になりがちな集会であるが、新たな試みで入学前の不安を払しょくできたのではないかと考えている。

4. 生徒への配慮

4.1 奨学金

2022 年度奨学金の状況は以下の通りである。

奨学金名	受給者数
横浜市高等学校奨学金	1
茂木本家教育募金	4
古岡奨学会	2
埼玉県高等学校等奨学金	5
東松山市奨学資金	1
あしなが育英会	2
群馬県教育文化事業団高等学校等奨学金	1
公文公記念奨学金	4
加藤山崎奨学金	1

大隈記念	8
小野梓記念	13
早稲田カード	3
早大生協給付	1
校友会給付	4
本庄高等学院	3

4.2 保健室

4.2.1 健康診断

生徒定期健康診断：4月21日（木）実施。

新型コロナウイルス感染対策のため、耳鼻咽喉科検診は耳のみ実施し、鼻と咽喉については問診票による聴取となった。また、体育館内の密を防ぐため、1時間に対象とするクラスを制限し、例年より時間をかけて全学年終了した。

4.2.2 課外講義

熱中症予防指導：6月9日（木）実施

運動部を対象に、感染対策を行った上での熱中症予防指導を行った。

4.2.3 健康相談

保健室来室時に、必要に応じて健康相談を行った。試験前などは不安から精神的に不安定になる生徒が目立ち、時間を要するケースが複数あった。各校医による健康相談については、年に1回の頻度で実施した。

4.2.4 感染症対策

昨年度から引き続き、新型コロナウイルスの感染症対策が中心となったが、今年度は3学期にインフルエンザに罹患する生徒が少数いた。

2学期は稲稜祭後に新型コロナウイルス感染症がまん延し、一斉休校となった。また、学級閉鎖は複数回実施し、学校内での感染拡大を防止した。

4.2.5 カウンセリング

週2回相談室を開室し、大学学生相談室所属のカウンセラーが生徒や教職員の相談に対応している。今年度は相談枠を2枠増やし、相談件数の増加に対応できるように配慮した。結果、昨年度よりは比較的予約が取りやすくなった。

4.3 リハビリコンディショニングルーム

運動部サポートの一環として、月2回程度トレーナーによるスポーツ障害相談を実施した。17回開室で延べ55名が利用した。個別の運動障害に対し丁寧にリハビリ・トレーニングを指示して成果を得た。次年度は多くの生徒が利用できるよう周知したい。

4.4 共済見舞金

本学院では生徒の疾病・不慮の事故・災害等による医療費を相互扶助によって補助し、保護者の経済的負担を軽減することを目的に、独自の共済制度を設け、全生徒から年額5,000円を徴収している。2015年度から、より公平でわかりやすいシステムを目指し、現行制度の運用を開始した。これにより、本規程の所管箇所である早稲田大学学生部が大学生を対象に運営する学生健康増進互助会の基本的な考え方やルールに沿った医療給付制度となった。

2018年度、2019年度と2年続けて赤字の収支決算となったため、2020年度より財政健全化を目指し自己負担額の増加、給付額上限の引下げ、日本スポーツ振興センターとの併用不可、という制度改革を実施している。過去5年度分の支給実績は次の通りである。

年度	2018	2019	2020	2021	2022
支給人数（延べ）	916	891	451	423	373
支給人数（実数）	294	247	136	136	110
支給上限額到達者	11	11	4	5	2
支給金額（円）	5,092,429	4,910,736	1,915,688	1,925,249	4,079,574

4.5 学校安全管理

4.5.1 安全管理体制

本学院のキャンパスは浅見山とよばれる丘陵地にあり、85万平方メートルにおよぶ広大な敷地を有している。古墳群が点在し、オオタカ等の野生生物保護のため、環境保全の必要にも迫られている。そのような特殊な事情により、学校を外部から物理的に遮蔽する塀や門を設けることができない。そのため、日直にあたる教員が校地を巡回し不審者の侵入防止・発見に努めるほか、下校時刻の遵守指導を行っている。

これに加えて、外部委託によるキャンパス管理室を設置し、24時間体制で巡回を行うなどセキュリティを強化している。キャンパス内外をつなぐ出入口や建物の開口部には防犯カメラを設置し、校舎にも最新の入退出管理機器を設置するなど監視体制も整えている。2023年度には不審者の侵入を防ぐために、約2 kmにおよぶ柵を設置する予定である。

本庄キャンパス全体としては、労働安全衛生法第19条第1項に規定される安全衛生委員会が設置され、本学院を含むキャンパス内各箇所から委員が選出されている。委員会は毎月定例で開催され、キャンパス内の安全衛生全般について報告や確認を行なっている。

また、4月には消防署の協力により防災訓練を実施し、災害発生時の避難経路の確認、防災意識の高揚を図った。

4.5.2 交通安全指導

自転車による通学経路を指定し、指導を続けている。具体的には4月、9月、1月に早苗寮前、高崎線歩道橋南側ロータリー、稲稜ホール入口にて自転車走行の指導を行った。電車通学の生徒については、電車通勤の教員が中心となって生徒の乗車状況を確認し、ホーム上での危険防止（歩きスマホの指導）等にあたっている。自転車による大きな事故やトラブルは起こらなかった。

4.5.3 防災訓練

全校生徒・教職員を対象とした防災訓練を毎年を実施している。2022年度は6月23日（木）に火災が起こったことを想定し、消防署の指導による消火訓練なども含め実施した。

5. 生徒進路

5.1 進学学部

5.1.1 学部決定の方法

（ア）総得点方式

成績の上位者から順番に、希望の学部学科に推薦する。

（イ）G選抜方式

学部受け入れ枠の最大10%を上限として、学業成績だけでなく思考力や判断力、意欲、主体性など多面的評価によって学部推薦を決定する。本年度は4名が入学した。

（ウ）日本医科大学への推薦

推薦条件を満たした希望者から、成績や諸活動および意欲などを総合的に評価し推薦者を決定する。本年度は1名が入学した。

2023年度入学推薦枠数/2023年度学部進学者数(学部・男女別)

学部	学科 専修		2023年度入学推薦枠数		2023年度学部進学者数			
			学科定員	学部合計	計	男子	女子	学部合計
政治経済学部	政治学科		25(=3)	73	28	8	20	73
	経済学科		33(=3)		33	19	14	
	国際政治経済学科		15(=3)		12	3	9	
法学部			44	44	35	21	14	35
文化構想学部	文化構想学科		21	21	21	4	17	21
文学部	文学科		16	16	16	8	8	16
教育学部	教育学科	教育学専攻	5	40	0	0	0	14
		生涯教育学専修	4		0	0	0	
		教育心理学専修	2		2	1	1	
		初等教育学専攻	2		0	0	0	
	国語国文学科		8		1	0	1	
	英語英文学科		8		1	1	0	
	社会科	地理歴史専修	6		3	2	1	
		公共市民学専修	8		0	0	0	
	理学科	生物学専修	2		1	1	0	
		地球科学専修	2		1	0	1	
	数学科		4		2	2	0	
	複合文化学科		4		3	2	1	
商学部	Mathematical Sciences		32	32	32	21	11	32
基幹理工学部 ※2年進級時に学 科選択	学系Ⅰ		10	38	0	0	0	38
	学系Ⅱ		28		4	4	0	
	学系Ⅲ		7		27	21	6	
					7	3	4	
創造理工学部	建築学科		12	35	7	2	5	28
	総合機械工学科		7		5	3	2	
	経営システム工学科		7		7	6	1	
	社会環境工学科		5		5	4	1	
	環境資源工学科		4		4	4	0	
先進理工学部	物理学科		4	34	1	1	0	13
	応用物理学科		5		2	1	1	
	化学・生命化学科		3		3	1	2	
	応用化学科		6		1	1	0	
	生命医科学科		3		3	0	3	
	電気・情報生命工学科		13		3	2	1	
社会科学部	社会科学科		20	20	20	15	5	20
	TAISIプログラム		(2)*		0	0	0	
人間科学部	人間環境科学科		4	12	0	0	0	0
	健康福祉科学科		4		0	0	0	
	人間情報科学科		4		0	0	0	
スポーツ科学部	スポーツ科学科		6	6	0	0	0	0
国際教養学部	国際教養学科		13	13	13	6	7	13
日本医科大学医学部			2	2	1	0	1	1
合計			388		304	167	137	304

6. 教員の活動

6.1 教員の研究活動

6.1.1 特別研究期間

本校では毎年 3 名を上限に、最長 1 年間の特別研究期間（サバティカル）を取ることができる。

本年度は、英語、理科物理、体育の 3 名が研修を行った。

英語の教員はオーストラリアに 1 年間滞在し、“An investigation into Language practice, Ideologies and management inn Japanese families residing in Australia”を、理科の教員は世界各国の教育事情を視察し、「様々なスケールでの科学教育アウトリーチ活動について」を体育の教員も海外の学校を視察し、「学校体育教育における歩行とその動作についての指導法研究」の各研究を行った。

6.1.2 研究紀要

本学院専任教員、非常勤講師等が執筆した研究論文や調査報告を掲載し、年 1 回刊行している。2022 年度は研究紀要第 41 号を発行した。掲載論文は 3 本で例年に比してかなり少なかった。コロナ禍により海外・国内の研究調査が非常に困難であったことも影響したと考えられる。

- ・ An investigation into Language practice, Ideologies and management inn Japanese families residing in Australia”
- ・ 様々なスケールでの科学教育アウトリーチ活動について
- ・ 甘肅高台出土画像磚に見る十六国時代河西社会の変動

6.1.3 教員の研究成果

【課題研究】

- ・ 大塚未来 早稲田大学 2022 年度 特定課題研究助成費 研究基盤形成 2022C-554 「高校生

による古墳の物理探査をテーマとした学際型科学教育発展に向けた国際連携ネットワークの構築」

- ・ 大塚未来 下中記念財団 第 60 回下中科学研究助成金「高校生による宇宙線を用いた古墳の物理探査を通じた国際連携ネットワークの構築」

【論文】

- ・ 三崎良章「甘肅高台出土画像磚に見る十六国時代河西社会の変動」『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』41
- ・ Ryojun Ito, Satoshi Kumabe, Akio Nakagawa, Yusuke Nemoto, 「Kampé de Fériet hypergeometric functions over finite fields」, [arXiv:2212.14321](https://arxiv.org/abs/2212.14321)
- ・ 細喜朗「J-POSTL を活用した高校の異文化理解授業におけるルーブリック評価の考察ープレゼンテーションの評価基準に着目してー」 JACET 言語教師教育 Vol.10(No.1) 82-94 2023 年 3 月 [査読付き]
- ・ Yoshio HOSO, Fumiko Kurihara (2022) Improvement of English Classes Using J-POSTLE: Reflections on Two Years of Cross-Cultural Understanding Classes” Language Teacher Education Vol.9 (No.2) 48 - 64 2022 年 07 月 [査読有り]
- ・ 細喜朗「論証教育の実践例」 Cambridge Japan Booklet 2023 2022 年 010 月

【書籍】

- ・ 細喜朗 (分担執筆)、浅野 雄大・芹澤 和彦 (編集代表)『中学校・高等学校 4 技能 5 領域の英語言語活動アイデア』明治図書

【口頭発表】

- ・ Miki Ohtsuka “The "Fun-Q" muography project” 24th International Particle Physics Outreach Group Meeting, 2022 年 10 月 26-28 日
- ・ Miki Ohtsuka “Report of European muography tour as a high school teacher”, Muographers 2022 General Assembly, 2022 年 12 月 13-15 日
- ・ 太田洋平. 「(Panaite の意味での)Heisenberg Double の積の具体的表示について」 Toyama workshop on quantum groups and related topics , 2022 年 9 月 18 日 - 21 日
- ・ Yusuke Nemoto. 「On the K 2-regulator of the Hesse cubic curve and hypergeometric functions」, 第 21 回仙台広島整数論集会, 東北大学, 2022 年 7 月 12 日 - 15 日
- ・ Yusuke Nemoto. 「Some relations among L-functions, regulators and hypergeometric functions」, L-functions and Motives in Niseko 2022, ニセコヒルトンビレッジ, 2022 年 9 月 7 日 - 12 日 (ポスター発表)
- ・ 根本 裕介. 「CM を持つ楕円曲線の L 関数の特殊値の超幾何関数表示」, 津田塾大学整数論ワークショップ 2022, 津田塾大学, 2022 年 11 月 19 日 - 20 日 (招待あり)
- ・ 根本 裕介. 「Regulator of the Hesse cubic curves and hypergeometric functions」, 仙台超幾何小集会, 東北大学, 2023 年 1 月 17 日 (招待あり)
- ・ 根本 裕介. 「CM を持つ楕円曲線の L 関数の特殊値の超幾何関数表示」, 九州代数的整数論 2023(KANT2023), 九州大学, 2022 年 3 月 1 日-2 日 (招待あり)
- ・ 細喜朗 「高校の異文化理解授業におけるルーブリック評価の考察」ープレゼンテーションの評価基準に着目してー」 言語教育エキスポ 2023 2022 年 3 月
- ・ 細喜朗 Bloom’s Taxonomy に基づいたライティング指導についてーQFT に注目してー [招待有り] 文教大学教育学部 2022 年 12 月
- ・ 細喜朗・橋本懂子 「生徒は論証における論拠をどうして推測できないのか」ー論拠データ分析を中心に 教育目標・評価学会 2022 年 12 月
- ・ 細喜朗 論証モデルに基づいたライティング指導についてーQFT を活用した Prewriting 活動に注目してー [招待有り] EGG 英語授業研究会 2022 年 9 月

- ・ 細喜朗 「QFT を活用した ライティング指導の提案」 全国英語教育学会第 47 回北海道研究大会 2022 年 8 月
- ・ 角倉慧一朗・成瀬政光・宮川健 「「円上の格子点」を題材とした数学的探究の実践：SRP をよりどころにして」 日本数学教育学会第 10 回春季研究大会（オンライン）、2022 年 6 月 5 日、ポスター発表。
- ・ 成瀬政光 「高等学校数学科での探究を通じた学習活動の可能性の検討」 日本数学教育学会第 55 回秋期研究大会（オンライン）、2022 年 11 月 12 日、ポスター発表。
- ・ 成瀬政光・宮川健 「定積分についての認識論的分析：数学史を参照した題材分析の一例」 全国数学教育学会第 57 回研究発表会（@早稲田大学）、2022 年 12 月 11 日。

6.3 社会活動

6.3.1 学会役員

- ・ 日本英語教育学会・編集委員
- ・ 物理教育研究会 運営委員
- ・ 映像メディア英語教育学会 専務理事（会員管理担当）

6.3.2 学外委員

- ・ 本庄市行政不服審査会委員
- ・ 埼玉県立歴史と民俗の博物館協議会委員
- ・ さいたま市商業等振興審議会委員

6.3.3 学外講師・出張授業等

- ・ 外国人教員研修留学生を対象とした現職教員による講演会「日本の高校教育の現状と課題」（筑波大学人間系）
- ・ 公立大学法人高崎経済大学非常勤講師

6.3.4 教科書等の執筆

- ・ Enrich Learning English Communication I（東京書籍）編集協力者
- ・ All Aboard English Communication I（東京書籍）編集協力者
- ・ 『地学基礎』高等学校理科教科書（啓林館）編集協力者
- ・ 『わたしたちの地理総合 世界から日本へ』文部科学省検定教科書 高等学校 地理歴史科用（二宮書店）執筆者
- ・ 『わたしたちの地理総合 世界から日本へ』文部科学省検定教科書 高等学校 地理歴史科用 教師用指導書朱書き編（二宮書店）執筆者
- ・ 「情報Ⅰ」、高等学校情報科教科書、日本文教出版 執筆者
- ・ 『物理基礎』『物理』文部科学省検定教科書（実教出版） 高等学校理科教科書 執筆者

6.3.5 外部資金の獲得

- ・ 独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金奨励研究「墳墓画像による五胡十六国時代の再検討」（22H04005, 400 千円）

6.3.6 その他

- ・ こども大学本庄 学長
- ・ 図書館運営 図書委員長

6.4 教員研修

- ・ R4 年度教育相談基幹研修（主催：独立行政法人教職員支援機構）への参加
- ・ 「教育相談について」2023 年 3 月 1 日実施（学校内研修）

7. 教育研究施設

7.1 学内施設

7.1.1 教室

教室は普通教室 23、ゼミ室4、理科実験・講義室 5、情報処理室2、美術室 1、体育講義室 2、地理演習室 1、音楽教室1、家庭科調理室1、メディアルーム1、CALL教室 1、大教室1 で構成され、各教室にはIT機器とスクリーンが設置されている。

7.1.2 稲稜ホール

稲稜ホールは学年集会や、各学年対象の健康教育講演会、外部有識者による特別講演会、その他各種様々なイベント、音楽の授業やブラスバンド部・グリー部の活動、演劇部・軽音楽部等のミニコンサート等に常時利用されるほか、学外の機関の利用にも供している。それらを含め年間の施設利用回数は、2018年度は100回を超えていた。

本学院の教育活動上極めて重要な役割を果たしていたが、2020年度はコロナ禍の中、利用のガイドラインについて感染状況に応じた対応をせざるを得なかった。厚労省のコロナ対応に関する換気の基準は満たしている。

7.1.3 CALL教室

PC教室に隣接した46名対応の教室である。教卓周辺はスクリーンを使った発表に適した広めのスペースがあり、2名1組の机にはPC、カメラ、マイク付ヘッドホンが備わっている。授業の展開に応じてアクティブラーニングや音声・文書ファイルの配布と回収が可能である。放課後は事前予約制で、発表リハーサルや課外講義、説明会やワークショップにも活用されている。

2019年以前は、授業以外の活用事例としては、始業前30分間の「英語朝練」や英語の学内公開授業（ポスターセッション）会場としての使用例があった

7.1.4 コンピュータ・インターネット環境

現校舎を使用するようになってから、PC 室 2 室（46 名対応）で多様な授業や課外活動を展開している。PC 室は教科「情報」、情報系の選択科目以外に、情報環境を必要とする様々な教科で使用され、また、休み時間・放課後は生徒に開放され、創作活動・検索活動に役立てている。また全ての教室に LAN の情報コンセントとプロジェクター・スクリーン・書画カメラが設置されている。また校内 3 カ所に無線 LAN のポイントがあり、情報コンセントのない場所でも WiFi でノート PC やタブレット、スマホ等でインターネットへの接続が可能である。

このような環境のため、ノート PC やタブレットを持参する生徒が増えている。2020 年度 2021 年度はコロナ禍の中で、不特定多数が使用する学校の端末を使いたくないという生徒が多いのか、自分の PC を持参する生徒が増えた印象である。校内の至る場所で課題や調べ物に役立てているようである。

ネットワークの帯域幅にもストレスはない。コロナ禍によるオンライン授業が増えたことや、不特定多数の生徒の触れるキーボードを嫌う意識から、自身のノート PC やタブレットを持ち歩く生徒が大幅に増えた。

今後は PC 室のデスクトップパソコンを使って授業を行う時代から脱却する動きをしなくてはならないと思っている。次年度より、BYOD(Bring Your Own Device)に完全移行する方針である。

7.1.5 体育館

2020 年 2 月に完成した体育館は、従来の学院体育館より広いメインアリーナと、部室やトレーニング室、多目的室等が併設された施設である。それ以前より生徒の移動時間も大幅に削減され、冷暖房も完備されたため、より一層充実した授業や部活が実施できている。雨天時も 3 クラス同時展開が可能のため代替種目の実施も可能となった。また、WiFi を活用して映像を見ながらの授業展開が可能となった。

7.1.6 共通教室棟体育館

昨年度より、大学学生課所管本庄セミナーハウスの施設となったが、主に雨天時の体育や部活動で使用申請を行い、活用している。

7.1.7 サッカー場

サッカーコート1面を十分に確保できる広さであり、それを活かしたサッカーの授業展開が可能である。授業や球技大会等行事、クラブ活動と年間を通しての使用頻度は非常に高い。水はけは非常に良好である。

7.1.8 ラグビー場・陸上競技場

陸上競技、ラグビーの授業展開が十分にできる広さである。体育祭、稲稜祭、球技大会、マラソン大会等の行事、また災害時の第一避難として定めており、その使用頻度は高い。クラブ活動では、陸上部、ラグビー部が使用している。400m 6レーンの充実したトラックに加え、幅跳び用ピット、高跳び用マット、投擲用サークルと他種目に取り組める充実した環境である。野球場野球部の活動以外では、主にソフトボール、ゴルフの授業で使用している。各種目授業を十分に展開できる広さである。マラソン大会ではスタート地点とし、クラブ活動では、硬式野球部が使用している。

7.1.9 テニスコート

テニスコート6面（クレー4面・砂入り人工芝2面）は、テニスの授業と、クラブ活動では硬式テニス部とソフトテニス部が共用している。

7.1.10 図書室

図書室を頻繁に利用する生徒はまだ一部に限られていると思われるため、より多くの生徒に図書室を有効活用して貰えるよう、学内関係個所と協力しつつ所蔵資料の充実、図書室内の環境整備などに努めたい。

元衆議院議員の河野洋平氏より継続的に書籍の寄贈があり、特設コーナーを設けている。

7.1.11 食堂

食堂はホールとパンシヨップから構成されている（運営は早稲田大学生協に委託）。座席数は、コロナ前の2/3程度とし、引き続きパーティションを設置しながらの利用となった。

7.1.12 その他

11月4日に3年生全員を対象に実施したGTEC試験の会場や生徒の待機場所として、93,94号館（早稲田リサーチパーク）を利用した。他の利用者との混乱を避けるため、施設入口等には管理者を配置し、生徒への注意喚起を行なった。

7.2 スクールバス

今年度も、コロナウィルス感染症予防のため、バスの密な環境を避けるため、通常6台で運行しているスクールバスを7台運行とした。

朝の本庄発バスが込み合う時間帯は台数も多く手配しているため、バスに乗り切れない生徒はほとんど見られなかった。

一方で、朝、通学時に座りたい生徒がバスを1台見送り、バス停が先頭から詰まってしまうケースが見られたことや、最終下校時刻のバスで、バスの出発時間を過ぎてからも乗ろうとしてくる生徒が見られることが来年度の課題である。

7.3 生徒寮

7.3.1 早苗寮

今年度は、引き続き新型コロナウイルス対策を含む寮内ルールの下で寮運営を行った。具体的には、食堂テーブルのパーティション設置や利用制限、他室訪問禁止などであった。クリスマス会や防災訓練は、感染対策のために人数を減らし、時間を短縮するなど工夫をしながらの実施となった。

外泊の制限や食堂レイアウトは、徐々に従来通りに戻しているが、寮内で寮生が1人であることが多く、寮生同士の関りが少なくなっている。来年度は、寮内での周囲とのかかわりをテ

ーマに取り組んでいきたい。

7.3.2 寮寮

早苗寮と同様に、今年度も、引き続き新型コロナウイルス対策を含む寮内ルールの下で寮運営を行った。本年度は、台湾からの留学生、モンゴルからの留学生の2名が寮生と共に生活している。

今年度は、1学期に花火大会、2学期にクリスマス会を行い、楽しそうに寮生同士で交流をしていた。

早苗寮と同様に、寮生同士の関りが少なくなっているため、来年度は、寮内での周囲とのかかわりをテーマに取り組んでいきたい。

8. 学外との協力・連携

8.1 保護者との連携（保護者の会）

本学院では保護者会を年に2度実施している。第1回目は6月初旬の土曜日放課後に開催する。1年間の学習や行事に対する諸注意が内容の基本である。第2回目は12月の冬季休業に入った最初の日曜日に実施する。クラスや行事の状況報告、進級進学に向けた指導が内容の中心となる。3年生では、ミスマッチのない学部選択に向けた進路指導のため、この保護者会においてクラス組主任との間で三者面談が行われる。両方とも、同時に寮の保護者会も並行して開催される。

2022年度については、3年ぶりに年2回の保護者会を対面で実施した。来校を基本とし、オンライン配信等は基本実施しない方針であったが、寮生保護者会について、その性質上録画配信をおこなうこととした。こうしたオンラインと対面のハイブリット形式が、今後の基本的な会の開催方針になると予想される。

また保護者による組織として、本学院には「保護者の会」がある。PTAとの違いは、保護者の会は、教員がその動きには基本的には関わらずに、会独自に活動していることである。保護者の会の活動は、保護者向けの広報誌の作成や卒業式関連のイベントの実施、また保護者同士の親睦を深めるための企画・実施等である。

8.2 卒業生との連携（同窓会・キャリア教育）

2022年度はコロナ禍により2020年度から実施を見合わせてきた稲稜祭における出展や記念品グッズ作成、卒業生への就職セミナーなど、同窓会活動が再開した。

卒業生との連携として、本校ではキャリア教育の充実が上げられる。凡そ月1度土曜日放課後に実施しているキャリアデザイン講座、毎年9月の2週に渡って実施するキャリアウィークでは、各界で活躍しているOB/OGを講師として招き、職業について講義をしてもらっている。OB/OGにお願いする利点は、高校生活・大学生活が本校生徒とダブるために、どのような高校・大学生活を送り、どのように職業選択を行ったのかという時系列を自分のこととしてイメージしやすいことがあげられる。

8.3 地域との連携

本庄学院は1982年の開校以来、教員の持つリソースや学校設備・器具を用い、地域の人たちに対して講習会や特別講義を実施してきた。本庄キャンパス内に本庄プロジェクト推進室ができてからは、連携を行い、多様な講座を地域に公開している。2018年度より、本庄市内小学校へ出張授業を行うプロジェクトが開始した。大きく一般的な授業内容を展開する総合学習支援プログラムと、留学生を軸に英語・国際理解活動を展開する国際理解支援プログラムに分かれる。また、生涯教育を目的とした本庄市が主催する市民総合大学、こども大学ほんじょうにも講師・学長の立場で協力をしている。

2022年度は小学校の総合学習支援プログラムでは、6月15日（水）に本庄西小（チアダンス）、11月9日（水）に中央小（川と海の環境）、12月14日（水）に秋平学校（川と海の環境）

2月1日（火）に共和小学校（川と海の環境）、国際理解支援プログラムでは9月7日（水）に本庄西小学校（フリーダさん、ドイツについて）、9月21日（水）に共和小（エネレルさん、モンゴル）、1月18日（水）に藤田小（田さん、台湾）と本校生徒が通訳を務めた。

市民総合大学でも7月10日（日）「茶道の基本教えます」、7月17日（日）「100万年前の虫を探そう」、7月30日（土）「ラジオを作ろう」を実施した。こども大学本庄では7月24日（日）「電気と磁石」「望遠鏡の仕組み」を実施した。夏休みに予定していたこども大学ほんじょうは延期の上、中止となったが、11月に本庄早稲田リサーチパークの主催で本庄市内児童向けに Waseda English Kids を開催し、3名の留学生と6名の生徒が講師として参加した。



フリーダさんの国際理解支援授業の様子

学校が学校だけで閉じている時代は終わり、多様化・グローバル化の時代の中、学校は教育リソースを学外に求めより効果的で高いレベルの教育を目指すとともに、地域の文化的拠点にならなくてはならないと考えている。

8.4 大学・他附属校との連携

本庄高等学院は早稲田大学の附属校であるため、大学との連携プログラムが豊富である。

8.4.1 アントレプレナーシップ育成事業

早稲田大学アントレプレナーシップセンターでは、学生の起業家精神を涵養し、イノベーションを生み出す人材を輩出する教育に取り組んでいる。本庄高等学院においても、同センターや本庄市の協力を得ながら、高校生がアントレプレナーシップを身に付けるためのプログラムを広げており、2022年度は以下の通り実施した。（ ）内は参加者数。

- ・9月3日（土）自分の可能性に気づく エフェクチュエーションワークショップ（3名）
- ・12月3日（土）～12月5日（月）本庄市連携 地域創造ワークショップ（8名）
- ・12月14日（水）スタンフォードd.school講師によるデザイン思考ワークショップ（24名）
- ・2月21日（火）WASEDA-EDGE Demo Day（6名）
- ・3月11日（土）グローバルアントレプレナーを目指す人への英語ピッチトレーニング（2名）
- ・3月22日（水）GTIE東京大学アントレ教育シンポジウム（2名）
- ・3月23日（木）Sweden Innovation Day（4名）



Waseda Edge Demo Day



GTIE東京大学アントレ教育シンポジウム

8.4.2 国際部との連携講座「留学のススメ」

2018年度より大学国際部との連携で、特に大学進学後における留学への理解を進めるべく、特別講座を実施している。2020年度よりオンライン開催を余儀なくされているが、オンラインであれば保護者の参加も可能であり、対面とは異なる効果があることを感じている。

2022年度は以下の通り実施した。

- ・ 6月9日（木）19:00～20:00
- ・ 11月11日（金）18:30～19:30

8.4.4 本庄早稲田の杜ミュージアムとの連携プログラム

本庄早稲田の杜ミュージアムは早稲田大学5番目の博物館として、同キャンパス内に2020年10月に開館した。本庄市近辺で発掘された考古学資料とともに、定期的に入れ替えながら早稲田大学所蔵の文化財をテーマ展示している。

2021年度より、本校生徒が学芸員見習いとして休日に、博物館業務の手伝いをするプログラムを開始し、2022年度も継続した。業務は、市民に向けた埴輪作り・勾玉作り・土器洗いなどのワークショップの補助、展示物入れ替えの補助、お客様に対する説明ボランティア等である。

8.4.6 古墳の物理探査活動「墳Q」

早稲田大学考古学資料室・文学部・本庄市・高エネルギー加速器研究機構と連携した古墳の物理探査活動「墳Q」活動と題して学校の周りにある古墳を地中探査レーダーや宇宙線(宇宙から降り注ぐ自然放射線)を用いて透視しようというプロジェクトを継続的に実施している。10

人ほどの生徒が、月に一回程度勉強会、その他は古墳班、ハードウェア班、ソフトウェア班に分かれて活動している。考古学資料室や本庄市の協力の下、文献調査、古墳巡検、研究者と共に宇宙線透視装置OSECHIの開発、大学スタッフや大学院生の指導の下古墳の地中レーダー探査等を継続的に行っている。



古墳の地中レーダー探査の様子

8.5 企業との連携

本庄学院では企業との連携プログラムを推進している。インターンシップにつながることで、学校で学んだ基礎知識を現場で実践する際の困難を経験することを期待している。

以下に、2022 年度実施プログラムの主なものを紹介する。

(ア) JR 本庄早稲田駅との連携プログラム「ほわフェスタ」

「ほわフェスタ」は 11 月 13 日（日）に JR 本庄早稲田駅で開催された、上越新幹線開業 40 周年記念式典である。JR 本庄早稲田駅からの依頼を受け、スタッフ希望者を募り、7 名を決定した。6 月より JR 本庄早稲田駅とのミーティングを重ね、開催ポスター、缶バッジ制作、ポスターコンテスト、思い出コーナー、イベントプログラムの検討などを行い、開催にこぎつけた。

当日はあいにくの曇り空であったが、多くの市民の方が訪れ大盛況であった。ステージでは書道部、應援部、ダンス同好会、軽音部によるパフォーマンスが行われた。また、JA による野菜の直売、キッチンカー、ミニ新幹線、駅長服を着ての記念写真コーナーなど老若男女問わず楽しめる場となっていた。

12 月 15 日（木）東日本旅客鉄道株式会社高崎支社長の南沢氏が本校を訪問し、スタッフに直絶感謝状を手渡した。また、イベント参加団体には一人一人記念品が配布された。



(イ) ファーストリテイリング・国連高等難民弁務官事務所（UNHCR）による「服のチカラ」プロジェクト

本校は 2022 年度のファーストリテイリング・国連高等難民弁務官事務所（UNHCR）が主催

する「服のチカラ」プログラム実施校に選ばれた。このプロジェクトは、使われないでタンスの奥に眠っている子供服を世界中の難民に届けようというものである。これを受け、スタッフを募り、20名のメンバーでこのプログラムを開始した。

本校生徒・保護者他、市内小学校・市役所・早稲田国際リサーチパークにも協力を呼び掛けた。取り組みは新聞にも取り上げられ、他市からも協力の連絡をいただいた。

11月14日（月）1日ばかりで梱包・発送作業を行った。回収数は6525着、67箱であった。



(ウ) ほんじょう FM

2021年11月より、希望する本校生徒が地域FM局であるほんじょうFMのパーソナリティを務めており、毎週木曜日17:00～17:45の番組枠を受け持っている（番組名「くまごじ」）。

2022年度は、高校生の考えや学校生活の様子を伝える以外に、留学生による異文化紹介や市民の方のインタビューを通して、本庄市をより深く理解する内容を増やしたことが特筆される。

8.6 募金

2022年度の教育振興資金寄付件数は82件、寄付金額は14,520,000円であり、その他にも本庄高等学院指定寄付や部活動指定寄付を10件、1,321,916円を受け入れた。

今後も引き続き、さらなる募金獲得に向けて今まで以上に幅広く活動を行なう必要がある。

9. 管理運営

9.1 教員

9.1.1 教諭会

2021度は定例教諭会が11回（入試判定会、卒業・進級判定会は除く）、臨時教諭会が28開催された。例年臨時教諭会は10回程度であったが、新型コロナウイルスへの対応のために3倍ほど回数が増えた。

今年度は、入試や人事関係以外は感染に配慮し、ZoomによるTV会議で実施した。

なお、臨時教諭会には生徒指導を議題とする会議が複数回含まれる。

9.1.2 各種研修

教員には各種研修が義務付けられている。

情報セキュリティセミナー・ハラスメント防止セミナー・学術研究倫理セミナー・ダイバーシティ&インクルージョンセミナーをまとめた教職員セルフマネジメントセミナーはオンライン上で試験の形で、全問正解の合格が義務付けられている。

2023年4月にハラスメント防止研修会を非常勤講師ガイダンスと同日開催、専任以外の教員も含め、ハラスメント防止等について再認識していただくこととした。

9.2 委員会

2021 年度は、それ以前の委員会活動の反省を含め、昨年に続き大幅な改編・統廃合を行ない、校務分掌のスリム化、教員の業務量の軽減化を目指した。以下に、各委員会の検討事項及び取り組みを紹介する。おおよそ、一人の教員が2委員会を兼ねることになる。

委員会	構成	メンバー
教科主任会 委員長：教務担当教務主任	教員 8、教務 2、職員 3	教科主任、教務担当教務、事務長、職員
学年主任会（奨学生、生徒表彰選考）＊委員長：教務	教員 3、教務 1、職員 1	学年主任、生徒担当教務、養護教諭、事務長
生徒活動支援委員会・人権教育委員会（生徒会・稲稜祭・生徒指導、いじめ防止委員会兼務）＊委員長：教務以外	教員 8、教務 2、職員 1	各学年 2、組主任外 3、生徒担当教務、職員
安全委員会（体育行事、保健、その他安全配慮）＊委員長：教務以外	教員 8、教務 1、職員 1	体育 5、養護 1、全教科 3、生徒担当教務、職員
寮委員会＊委員長：寮主任	組主任外、教務 2、職員 1	組主任外 養護教諭 1、寮主任 2、生徒担当教務 2、職員
広報・出版委員会（杜・紀要）＊委員長：教務	教員 1、教務 1、職員 1	全教科 1、教務担当教務主任 1、職員
●入試委員会 ＊委員長：入試主任	教員 8、教務 1、職員 2	全教科 1、入試主任、教務担当教務主任、職員
教学支援委員会	教員 2、教務 1 名、	全教員 2、教務担当教務副主任 1
進路指導委員会（各種セミナー、卒論報告会） ＊●委員長：教務以外	教員 8、教務 1、職員 1	各学年 2、組主任外 3、教務担当教務副主任 1、職員 1
●留学・海外交流委員会 ＊委員長：教務以外	教員 8、教務 1、職員 2	全教科 1、英語 1、教務担当教務副主任 1、職員
図書委員会	教員 1、教務 1、職員 1	司書教諭 1、職員
学校評価運営委員会 ＊委員長：教務以外	学院長、教務、職員 1	学院長、事務長

※ ●は2年継続

9.3 教科別教員構成

教員の教科別・年齢別・男女別構成は次の表の通りである。

教科	専任教諭	非常勤講師	合計
国語科	6	5	11
地理歴史・公民科	7	13	20
理科	5	12	17
数学科	7	4	11
保健体育科	5	5	10
芸術科	1	3	4
英語科	9	7	16
情報科	1	5	6
家庭科	1	1	2
第二外国語	0	4	4

養護	1	0	1
合計	43	59	102

9.4 持ち時間数

2022年度の教員の平均授業担当時間数は次の通りである。2021年度から大きな変動はない。

1. 専任教員 14.1 時間（除長期欠勤者・特別研究期間適用者・養護教諭）
2. 役職者以外 15.0 時間
3. 役職者（教務） 8.0 時間
4. 非常勤講師 6.1 時間

9.5 教員構成

9.5.1 年齢別構成

資格	人数	21～30歳		31～40歳		41～50歳		51～60歳		61～70歳	
		人数	比率	人数	比率	人数	人数	人数	比率	人数	比率
専任教諭	43	1	2%	10	23%	17	40%	6	14%	9	21%
非常勤講師	59	29	49%	4	7%	7	12%	9	15%	10	17%
全体	102	30	29%	14	14%	24	24%	15	15%	19	19%

9.5.2 男女別構成

資格	人数	男		女	
		人数	比率	人数	比率
専任教諭	43	33	77%	10	23%
非常勤講師	59	43	73%	16	27%
全体	102	76	75%	26	25%

9.6 事務組織

事務所には、事務長の他、庶務係に専任職員3名、派遣社員2名が、学務係に専任職員2名、嘱託職員1名、派遣社員2名が配置されている。他に、理科室に実験助手（嘱託）2名がいる。

専任および嘱託職員の嘱任、解任、配置転換は大学が行ない、派遣スタッフについては大学が契約窓口となり、人材サービス会社から派遣されている。

なお、施設の管理、スクールバスの運行管理、図書室の運営については業務委託を行なっている。

9.7 生徒の出欠席・成績処理

生徒の出欠席・成績管理のために、早稲田大学オープンソースソフトウェア研究所が開発した学院向け教務システム「SchoolN@vigat¹」を導入している。同システムはリレーショナルデータベース化による情報の一元管理を特長とし、高度なセキュリティ保持や容易なデータ抽出・加工が可能になった。ユーザーインターフェースとしてウェブブラウザが採用されていることも、操作性や利便性の向上に役立っており、特に教員についてはデータの閲覧・編集がインターネット環境さえ整えばどこからでも可能になっている。

今後は、生徒の保健管理や課外活動管理などシステム化されていない事項を含め、ユーザーの希望を取り入れながらシステムの改善に取り組みたい。具体的な運用は以下の通りである。

- ・ 出欠席管理：科目担当者（教員）が毎時限の出欠席を入力した後、学期毎に組主任が欠席理由、成績通知表用所見を入力する。その他、学校行事など出欠席の一括入力が必要となる例外対応や集計処理は職員が管理する。

¹ 本庄高等学院用の出欠・成績管理システムである。各担当教員がその都度生徒の出欠や成績を入力し、その内容が指導要録・調査書等に自動的に反映される。

- ・ 成績管理：科目担当者が生徒の成績を入力した後、チェックから確定処理までを教員が行なう。成績通知表・指導要録・調査書等の成績関連帳票の自動出力が可能となっている。進学学部への調査書提出時など一括処理やデータ集計が必要な部分については、職員が編集・管理を行なっている。

9.8 教育実習

2週間（5月23日（月）～6月2日（木））および3週間（5月23日（月）～6月8日（水）、保健体育のみ5月30日（月）～6月15日（水））の期間で10名の実習生を受け入れた。実習前の打ち合わせ会は4月28日（木）に行った。実習生は教壇実習を行いながら、学校現場の業務の体験に努めた。実習期間中には体育祭や学年行事（早慶戦観戦）を実施して学校行事運営の実習も行った。教育実習の反省会は2週間および3週間の実習最終日にそれぞれ実施した。

9.9 広報・連絡

9.9.1 学校活動の広報

広報誌として『緑風』と『杜』を発行している。

『緑風』は本庄高等学院の発行する広報誌で、6月と12月に発行している。紙面は教員や生徒が執筆するコラムや行事報告、クラブ活動の戦績報告などで構成されている。

『杜』は保護者の会「杜」編集委員会が年1回発行する保護者向け広報誌である。同委員会の自主的な取材・編集により、学院施設や生徒行事・トピックの紹介、保護者の会の活動報告などを掲載している。

オンラインでの広報は、学院ウェブサイト（<https://waseda-honjo.jp/>）を主なツールとして使用している。ウェブサイトでは学院生活に関するニュースや出来事を継続的に発信しており、トップページの写真やリード文を見るだけで、本学院の最新の動向が伝わるようなページ運用を行っている。

課外活動のページでは、部活動ごとの活動概要（部員数・活動日・実績）を伝えるとともに、独自のWebサイトがある公認団体（クラブ）は、団体独自の情報発信を行なっている。こちらについては更新作業が実情に追いついていかないという難点がある。

今やウェブサイトは、学外の方に学校の基本的な情報、必要な手続・書式を得てもらう必須のツールとなっている。入試についても例外ではなく、本学院では入試の出願、合格発表、入学手続きの全てをウェブサイトを使用して実施している。

正確かつわかりやすい情報発信はウェブサイトの必要条件であり、このことに向けての体制づくりは今後も継続的に検討していく必要がある。現行のウェブサイトは約10年前に構築したものであるため、スマートフォン非対応であるなど、社会情勢にそぐわない部分も多い。そのため、次年度はウェブサイトの大規模な改修を検討している。

9.9.2 保護者・生徒への連絡・広報

本学院保護者に対して、迅速かつ確実に情報を伝達するため、FairCast（NTTデータ(株)提供）システムを導入し、基本的に保護者のメールアドレスを登録している。災害・緊急時の情報伝達のみでなく、日常の事務連絡にも用いることで、保護者への迅速な情報発信を行なっている。

生徒に向けての連絡は、通常はLHRや授業時に行うことで問題ないが、警報発令時の連絡、台風通過後の学校からの連絡、生徒達に配布している学校生活マニュアル集「学院生活のしおり」によらない緊急連絡などはWebサイトを使って発信・連絡している。特に、2020年3月2日以降の一斉休校以降における、新型コロナウイルス感染拡大に伴う学校からの様々な情報提供はすべてWebサイトを用いてその都度こまめに行い、なるべく生徒・保護者の不安を解消することを目指した。

9.9.3 学校に寄せられる情報

学校に寄せられる情報としては、以下の種類がある。

- ・ 警察・消防署・本庄市からの情報不審者や災害状況などに対して注意を喚起する情報が寄せられることがある。必要に応じて、生徒に下校時の注意などを呼び掛けている。
- ・ 市民・公共交通機関利用者等からの情報市民の方、電車の乗客の方から、主として生徒に対する苦情が寄せられることがある。状況を詳しく伺い、必要があれば生徒に注意を与えらるとともに、ご指摘いただいた方に対しては真摯に対応するように努めている。

10. 学校自己点検評価

この学校自己評価については、2022 年 3 月に項目ごとに担当者を割り振り、原稿を依頼した。

10.1 自己評価

早稲田大学の各箇所は毎年次年度計画と実施報告を大学にすることが義務付けられている。以下は、2023 年度 Waseda M S 明朝 150 会議への本庄高等学院の報告として大学へ提出した内容からの引用である。

10.1.1 2022 年度自己評価の主な内容

(ア)入試関連

- ・ 2023 年度入試に向けて
2020 年度以降の入試改革で実現した、一般入試・帰国生入試における願書の Web 化、2 次試験（面接）の廃止、入試会場の一本化（早稲田会場のみ）等を引き続き実施した。
- ・ 入試広報の効果的展開
学校説明会については、海外を含む遠方からの参加を容易にし、かつ新型コロナウイルス感染症対策の一環として、対面とオンラインのハイブリッド方式で実施した。また、一定期間、学院長、教務、入試担当、生徒会などのビデオが視聴できるようにしたことにより、当日参加できなかった世界各国の入学希望者が閲覧してくださった。効率よく学院の特色や入試情報を伝えるとともに、在校生や留学生も積極的に協力することで、高校生活を身近に感じられたと考える。また、生徒寮の情報や相談の場を提供し、親元を離れての様々なバックグラウンドをもった生徒との共同生活の雰囲気も感じていただくことができた。
学校案内パンフレットも、日本語と英語を用意したことにより、日本語が苦手な保護者にも学校の様子を知っていただくことができ、外国国籍の生徒も増えている。

(イ)教育関連

- ・ カリキュラム改定
2022 年度 1 年生から新学習指導要領に基づく授業を実施した。コロナ禍中、教育のオンライン展開などで積み重ねた経験とリソースは、ポストコロナでのさらに質が高く工夫された授業展開に活かされている。また、新たに設置された科目に関しては、必要な予算措置を講じ、十分な教材研究ができる環境を整えた。
- ・ 卒業論文指導の強化
第 2 学年から取り掛かる指導機関中に、卒論指導とともにライティング、プレゼン教育についての指導にも力を注いだ。また、対面で卒論報告会を実施し、2 年生にも卒論の流れや年間計画、そして意義などを伝えた。また、今年度から慶應義塾大学湘南藤沢高等部と発表会への相互参加を再開した。今後、高大連携や地域連携による課外活動等を通じて関心を持ったテーマなど、さらに多角的な課題設定も期待される。
- ・ 学部推薦選抜制度の充実
高大接続の一環で、ミスマッチがなくモチベーションの高い生徒を学部推薦すること

を目指し、学部との教育活動の連携や情報交換を密にし、生徒がそれぞれの学部・学科への理解をより深いものにできるよう努力した。対面による学部説明会も一部で再開され、生徒が大学を知る機会の充実が図られた。また、第一線で活躍中の社会人等も交えてのキャリアデザイン講座を実施し、学部で何を学ぶか・どんな未来を描くかをイメージできるよう、進路指導の充実を図った。

2021 年度より日本医科大学への学校推薦制度を導入し、同大学におけるキャンパスツアー、模擬講義、日本医科大学に所属する医師を招き医療現場や医師の日常生活などを話していただき、医学の道を志すうえでの心構え等の指導も行った。

- ・ 各種連携プログラムの充実

地元小学校との交流事業（総合的学習・国際理解教育の支援）、本庄市の生涯教育プログラムである市民総合大学・こども大学本庄の講師、本庄早稲田の杜ミュージアムでのワークショップ支援、ほんじょう FM での番組企画・出演、JR 本庄早稲田駅との連携で上越新幹線開業 40 周年記念式典「ほわフェスタ」、ファーストリテイリング・国連難民高等弁務官事務所主催「服のチカラ」プロジェクト等を実践した。

(ウ)国際関連

- ・ 生徒の海外留学・海外派遣

2018 年度に、1 年間留学をしても高校 3 年間で卒業できる「第 2 種留学」制度を作ったものの、2022 年度においては、コロナの影響で留学希望者が少なく、本年度は第 2 種留学で 1 名、第 1 種留学で 2 名が 1 か年の海外留学に旅立った。

- ・ 留学生の受け入れと留学期間中の支援

モンゴルからの留学生 1 名（「アジア架け橋プロジェクト」派遣生徒）を第 1 学年に迎えた。1 年生の通常授業と部活動（茶道部、應援部）への参加の他に、モンゴル文化の紹介活動（文化紹介、モンゴル語講座）、日本各地への研修訪問等のプログラム、地域貢献活動などに精力的に取り組んだ。

ドイツからの留学生 1 名（ILS）を第 2 学年に迎えた。通常授業と生徒活動（ダンス研究会）への参加の他に、地域交流、日本各地への研修訪問等のプログラム、地域貢献活動などに精力的に取り組んだ。また ICRF に参加し、ドイツ帰国後もミーティング参加、研究発表をオンラインで行った。

台湾からの留学生 1 名（日台交流協会）を第 2 学年に迎えた。通常授業と生徒活動（書道部、硬式テニス部）への参加の他に、地域貢献活動などに取り組んだ。また、書と水墨画に卓越した技術を持っており、国内のコンテストに積極的に応募し、各種賞を受賞している。帰国は 2023 年 6 月であるが、日本滞在期間中の思い出を伝えるべく、個展を開催すべく準備を進めている（2023 年 5 月 20 日～30 日於本庄早稲田の杜ミュージアム 2F）。

学習支援には早稲田大学への指定寄付を原資とした「荻野奨学金」を活用し、大学内でも活用 of 優秀事例として紹介された。

- ・ 大学進学後の留学促進

大学進学後の留学を視野に入れている生徒、保護者向けには、国際部・留学センターとの連携による留学説明会を、本年度はオンラインにより実施した。

早稲田大学には、世界各国の 600 以上の大学と協定を結んでおり、交換留学では学費の面でも研究の面でも大きなサポートがあることや、留学での横のつながりが将来のキャリア形成に大きな影響を与えることなどを学んだ。

- ・ 国内外教育機関連携でのオンライン学習交流プログラム

2022 年度は、他校では年度早々に対面の国際交流を復活させた高校もあったが、本校では 2023 年 1 月まではそれを自粛した。国内の宿泊を伴う活動は夏休み以降可能となった。そのような中、コロナ禍でも留学や国際交流の意義を伝え、モチベーションを維持してもらうために、以下のとおり様々なオンライン企画を実施し、多くの生徒が参加した。

- ① 特に新入生に向けて国際交流の良さを伝えるために、ミニシンポジウム「国際交流へのいざない」を 4 月に開催した。
- ② 韓国セロナム高校との学術交流シンポジウム（オンライン）を開催した。合同で 6 つのグループを作り、SDGs の各テーマについて、日韓の比較と問題解決についての提言を目指し、5 か月間の共同研究を行なった。12 月 21 日には最終目標であった国際フォーラムを ZOOM で開催した。
- ③ Queensland Academy for Science, Mathematics と共同研究を行い、1 月に開催された国際高校生科学シンポジウム ICRF2022 で共同研究発表を行った。
- ④ 姉妹校である Singapore National Junior College (NJC) と共同研究を行った。
- ⑤ 姉妹校であるタイの Mahidol Wittayanosorn School で対面開催した TISF2023 に 6 名の生徒が参加した。
- ⑥ 海外校、国内 3 校で、国際シンポジウム AACS2023 を 1 月に開催した。

10.1.2 2023 年度計画

（ア）入試関連

- ・ 願書の Web 化と 2 次試験（面接）の廃止、試験会場の一本化等の影響を分析し、2023 年度入試に活かすとともに、全国・世界から多様で資質の高い生徒を受け入れるため、引き続き入試改革に取り組む。
- ・ ポストコロナにおいても対面に加え、オンラインでの展開を含めた学校説明会や相談会を開催し、地方や海外から多くの受験生が参加できるようにする。また、地元指定校向けの説明会や出前講義にも対応します。早苗寮（男子寮）、梓寮（女子寮）の魅力作りを進め、PR 方法も工夫する。

また、以下の事項を 2023 年度中に検討する。

- ・ アルファ選抜・アイ選抜の見直しについて
アルファ選抜・アイ選抜は実施以来 20 年の歴史を重ねているが、本庄学院の現状にそぐわない点はいくつか目立ってきている。例えば、
（ア）男女の定員が現状の男女比に合っていないことは男女の不平等とみなされてもしかたがない。
（イ）生徒の活動が多様化し、グローバル化する中で、もしこの制度を維持するのであれば、部活動や英語力に中心を置いた選抜のあり方を見直しが必要ではないか。
（ウ）寮生を増やす入試制度の検討
設置当初より厳しかった寮の財政が、コロナ禍でさらに厳しくなり、特に梓寮は危機的な状況である。財政的な立て直しが出来なければ、プロパティが手を引くことになり、本庄学院がすべてを引き受けなくてはならぬ。地方への PR はもちろんだが、寮生を増やす新しい入試制度を導入する必要の可否と可となった場合、どのような入試制度を導入するかをご検討する。

（イ）教育関連

- ・ 多様で資質の高い生徒を受け入れる環境の充実
学びの環境をさらに整備し、生徒同士が議論し、互いに啓発し合えるラーニング・コモンズのスペースを確保したので、今後は活発な議論が行える仕組みをより充実させる施策を講じていく。また、親元を離れても、充実した学院生活を送ることができるよう、寮生に向けた独自の地域連携プログラムなど、引き続き魅力的な寮の在り方を工夫する。

- ・ 教育効果の高いカリキュラムの検討・多様で未来的な教育プログラムの展開
2022 年度からの新学習指導要領実施に伴い、新カリキュラムの整備・点検を継続的に行う。コロナ禍中に得た、教育のオンライン展開などで積み重ねた経験とリソースを活かし、ポストコロナでさらに教育効果の高い、未来的な授業展開、メソッドの開発を目指す。学部の意見を伺いながら附属のアドバンテージとなる、あるいは学部教育にシームレスに接続できるような授業展開を検討する。また、地域連携（貢献）・企業連携・国際交流・研修活動・各種コンテスト参加など多様なプログラムで、本庄学院教育の可能性を広げ、入学した資質の高い生徒の能力や知的好奇心を育成する。
- ・ ミスマッチのない学部進学と将来設計を目指して
従来の進路指導のあり方を改め、大学生活や将来を総合的に考えた上で、学部選択・留学・就職を考えられるような進路指導を目指す。学部との教育活動の連携や情報交換を進め、学部説明会のあり方を検討する。その第一歩として、学院長、入試担当レベルで高大接続方法を考え、キャリア教育同窓会や校友会との有機的な連携も作り発展させる。日本医科大学への学校推薦制度について、高等学院、早稲田実業とも連携のうえ、キャンパスツアーや医学系の模擬講義等を充実させる。また、現役学生からの声を直接学院生が聞ける機会を設けることも必要であると考えている。
- ・ 卒業論文を軸とした論文リテラシー教育の充実
新カリキュラム導入に際し、論文リテラシー教育をうまく組み込む努力を行うとともに、どの分野の論文でも必要となるであろう統計処理やデータサイエンスに関するコンテンツを導入する。
- ・ 兄弟高である高等学院との有機的な連携と附属生としてのアイデンティティ育成
高等学院との、今までの連携プログラムを成長させるとともに、新たな協働連携プログラムの検討も進め、附属校生としてのアイデンティティ育成にもつなげる。
- ・ チャット GPT に代表される A I 問題に適切に対応し、来るシンギュラリティの時代で生きてくための力とは何かを議論し、人間性を重視した全人教育を実現させるための具体的な方策を考えていく。

（ウ）国際関連

- ・ 留学の促進
1 年間留学をしても高校 3 年間で卒業できる「第 2 種留学」制度や、Education New Zealand (ENZ) との留学協定を活かし、本学院から海外に羽ばたく生徒の増加をめざす。特に ENZ では個人の目的に沿ったフレキシブルな留学内容がカスタマイズできることが魅力で、その効果が期待される。
今年度は第 1 回目の短期留学プログラムを 3 月 19 日（日）から 31 日（金）の 13 日間で行った。本庄生徒 29 名、高等学院生徒 13 名派遣。早稲田大学と New Zealand Education との高大連携協定に基づき、国際部国際課の支援によりニュージーランドの 2 地域 9 校が受け入れ校となって両高等学院生の高校生活およびホームステイ体験プログラムを実施した。保護者と生徒の関心は高く、受け入れ枠の 2 倍近い応募があった。
また、同時期(3 月 19 日（日）から 29 日（水）にアメリカ研修も実施することができた。
シカゴとボストンで英語のトレーニングと現地の教育機関での訪問研修を実施した。
なお、今年度夏にアメリカでの実施が予定されていた AIG 高校生外交官プログラムには 1 名が合格していたが、コロナ感染状況の関係でオンライン開催となった。
- ・ 受入留学生へのプログラム充実
本学院では、毎年 3 人まで、授業料を免除するための予算処置を講じて、受け入れる留

学生のための特別なカリキュラムや教育プログラムの充実を図り、在校生にとっても得るものの多いような形態を目指している。本年度はドイツ、モンゴル、台湾からの留学生を受け入れた。詳細は p 17 の通りである。

- ・ **ポスト SSH・SGH のプログラム**

本学院には、長い SSH・SGH 期間中に培われた経験と国内・海外校とのネットワークがあり、SGH 後も国際プログラムをどう継承させていくかの検討を継続する。これまで実施してきた Mahidol Wittayanusorn School (タイ)、National Junior College (シンガポール)、Hana Academy Seoul (韓国)、蘇州中学 (中国) との生徒訪問・受け入れの交流については、コロナ禍で一旦オンライン化あるいは停止されたが、対面での再開に向けて努力する。これらの学校との連携については、国際シンポジウムの開催等を含め、未来的な国際交流のスタンダードとなるようなプログラムを双方で検討したいと考えている。

10.2 2022 年度学校評価関係者・第三者評価会記録

10.2.1 概要

日時：令和 5 年（2023 年）5 月 13 日（土） 16:00～17:50

場所：本庄高等学院大会議室

参加者：

評価委員（五十音順、敬称略）

- ・ 小林清木 （埼玉県私立高校元校長）
- ・ 島津文弘 （島津会計税理士法人代表社員）
- ・ 鈴木啓太 （本庄プロジェクト推進室副室長）
- ・ 黛 昌智 （2022 年度 保護者の会会長）

本庄高等学院

- ・ 半田 亨 （教諭、学院長）
- ・ 影森 徹 （教諭、教務担当教務主任）
- ・ 首村 努 （事務職員、事務長）
- ・ 井崎健人 （事務職員）

10.2.2 学校関係者評価・第三者評価

【実施方法】

- ・ 学校自己評価報告書については開催日前に委員に事前配付した。
 - ・ 最初に影森より、本学院の概要について、パワーポイント等を用いて 20 分程度で委員の方々に紹介した（紹介内容については割愛）。
 - ・ そのうえで、学校自己評価報告書の項目ごとに質疑応答を行った。
- ※ 紙面の都合上、本議事録には学院からの概要の説明は記載せず、質疑応答関にのみ記載する。

—

【教育活動・教育理念】

- ・ 小林委員より、評価委員が教育活動の現場を見られるよう、授業参観を出来るようにという意見があった。これについては、開催時間の見直し等を含め、検討することとした。
- ・ 鈴木委員より、学校自己評価の教育理念に関する記載について、「VISION150 など、近年の方針等に基づく記載が多いが、本庄高等学院設立当初（早稲田大学 100 周年）の際の理念は素晴らしく、またこれまで積み重ねた本庄高等学院の歴史を振り返って、創立当初から揺るぎなく続く理念をもっと表に出せば、より素晴らしい学校であるという印象を持たれるはずである」という発言があった。
- ・ これに加えて、小林委員からは「変わるものと変わらないものを明確にし、PR することが大切」であるとのアドバイスがあった。

- ・ 学院からは、創立 50 周年イベントが近づいているので、こうしたご意見を踏まえて、創立 50 周年イベントに取り組んでいくという旨の発言があった。

【キャリア教育・課外活動および進路選択】

- ・ 島津委員から、高校等に対してキャリア教育を行う NPO 法人の例に触れ、そのような NPO 法人の活動と同じように、年間で幅広い業界のキャリア教育を自前で行っていることは本庄高等学院の良い取り組みであり、またこのキャリア教育が学部選択にもつながってくるという趣旨の発言があった。
- ・ 黛委員からは、本学院に通われていたご息女の経験も踏まえ、「OB/OG の話を聞いたのは参考になり、またコロナ渦のためにオンラインで開催されたことで、保護者も話が聞いたことは良かった」といった発言があった。
- ・ またコロナ渦で行うことができなかった対面での国際交流が 2023 年より再開できたことについて半田学院長より説明があり、関連して黛委員より、ご息女が参加したニュージーランドのプログラムにて、生活環境や授業の中で文化の違いを大きく感じる場面があったことが紹介された。

【寮】

- ・ 島津委員より、「かつての委託ホーム制度が寮に変更になり、教員が寮の中でどのように関わるようになっていくのか」という質問があった。
- ・ これに対して、影森教務担当教務主任より、委託ホーム制度当時と現在では、雰囲気が大きく変わり、委託ホーム時代のような家族的な雰囲気ではなくなり、教員がイベントの実施を呼びかけても参加する姿勢が委託ホーム時代とは異なっているという旨の回答があった。
- ・ 関連して、半田学院長より、コロナ渦以降、入寮者数が減っており、これに対して危機感を抱いている旨の発言があった。
- ・ これに対して、鈴木委員からは、早稲田大学では一都三県以外の入学者を対象とした奨学金制度を整えていることの紹介があった。また地方出身者を対象とした入試制度を作ることも一案として考えられる旨の発言があった。

【学校広報】

- ・ 黛委員より、本学院には群馬県出身の生徒が少ないことに関して、以下の発言があった。
 - ① 知人になぜ本庄高等学院を受験しないのかと聞くと、『遠いから』という声がとても多い。群馬県では電車およびバスを使用して通学するというのが一般的ではなく、在来線の本庄駅からバスが出ていることが知られていないケースがある。
 - ② 広範囲で展開しているような大手の塾がなく、地元の塾は地元の高校を受けさせるという方針が強い。だから生徒には本庄高等学院が視野に入らない。
 - ③ 埼玉県で実施されている北辰テストのような試験が群馬県にはなく、業者のテストを受けたことがないから偏差値を知らないという生徒が多い。
 - ④ これらの情報格差を解消すれば、実際には受験したいと考える生徒は多いと考えられる。
- ・ 小林委員からは、次の発言があった。
 - ① 本庄高等学院体験テストのようなものをやるのは一案である。
 - ② 県内私立高校では中学生向けに 3000 人規模の体験テストを開催した。また、小さな塾を集めて校長が塾向けにプレゼンを行うこともした。
 - ③ 本庄高等学院の心配な点は生徒募集である。生徒募集に関して 1 年先は闇で、あつという間に生徒が枯渇してこなくなってしまう世界。そのためには、設立理念・変わるもの／変わらないものをはっきりして PR していくことが大切。
 - ④ 圏央道よりも北は東京を目指していくという志向があり、また人口的にも危機感を持たなければならない。
- ・ 島津委員からは、次の発言があった。

- ① テレワークの浸透により軽井沢に引っ越している親も多いから、軽井沢あたりはねらい目である。
- ② またスバルや信越化学工業、P & Gといった近場に拠点のある大企業にアプローチするという考えもある。

10.2.3 関係者評価会・第三者評価印象

今年度の関係者会議でも、資料の事前送付および当日の PPT 等を使用した説明により、効率的に本学院の説明を行うことを心掛けた。また、校長等で高校教育歴の長い小林委員、私立高校にかかわりの深い島津委員のご協力を仰ぐことができ、例年になく積極的かつ忌憚のない意見を伺うことができた。

いただいた意見は今年度以降に活かしたいと考える。

10.2.4 最後に

学校を構成する生徒・教職員・保護者にとって「良い学校」を作るためには、現状の良い点・悪い点を客観的に評価し、良い点を強化し、悪い点を謙虚に改めて行く姿勢が重要である。残念ながら、学校という社会は、一般企業と異なり、外部からの視点で客観的な評価をすることが難しく、保守的に既存の在り方を継承してもなんとか事がなく過ごすことができてしまう。

しかし、世界的にグローバル化が進み、教育内容や生徒・保護者の意識が多様化する中、それでは学校としてはたち行かなくなってしまう。また、2020 年から始まったコロナ禍では大きく学校の底力が問われた。ポストコロナとなる 2023 年からは、コロナ禍における遺産をどう活かすか、コロナ禍で失われたものをどう取り戻すかが問われる。

ここに改めて、周囲の声に謙虚に耳を傾け、より良い学校づくりに活かしたいと思う所存である。

ご多忙中にもかかわらず長い本文をお読みいただき、ご意見をいただいた評価委員の方々にこの場を借りて、学校を代表し心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。